

正しい批判はいかにあるべきか（五）

——教条主義批判を装った修正主義——

山 本 二 三 丸

ま え が き

第一節 予備的注意

第二節 榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その一）……………（以上、本誌第二十一卷第一号所載）

第三節 榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その二）……………（以上、本誌第二十一卷第二号所載）

第四節 榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その三）……………（以上、本誌第二十一卷第三号所載）

第五節 榊氏による拙著『構造改革論批判』の批判（その四）……………（以上、本誌第二十一卷第四号所載）

第六節 榊氏による修正主義批判（その一）……………（以上、本号所載）

第七節 榊氏による修正主義批判（その二）……………

第八節 榊氏の「教条主義批判」の客観的意義

む す び

第六節 榊氏による修正主義批判（その一）

一

「わが国のマルクス・レーニン主義者」をもって任じられる榊利夫氏の拙著『構造改革論批判』にたいする攻撃論

正しい批判はいかにあるべきか（五）

文がどのような性格のものであるかということは、その実際の内容について丹念に検討を加えてきたこれまでの論究によって、ほぼ全面的に明らかにされることができたといえよう。それは、その言葉の本来の意味での批判というようなものではまったくなく、はじめから相手をやつつけ、これを「亡^ナきもの」にしようという意図のもとに、曲解と捏造、すりかえとペテンといったような、ありとあらゆる卑劣な方法をもちいて、ひたすら、「教条主義」、「セクト主義」、「事大主義」、「權威依存主義」、「党攻撃者」、「挑発者の相貌」、等々、思いつくかぎりのレッテルをおしつけることに終始しているものである。だが、榊氏の攻撃論文の内容と、その攻撃の対象にされた拙著の中の該当箇所とをつきあわせてみることによって、つまり、両者の事実そのものについて冷静かつ客観的に考察することによって、榊氏の攻撃論文は、かえって、マルクス・レーニン主義の初歩的・基礎的理論についての榊氏自身のおどろくべき無知、曲解、改ざんを露呈しているばかりでなく、榊氏や氏と同じ「品性」の持主である「わが国のマルクス・レーニン主義者」たちの頭脳を全面的に占めているものが典型的な小ブル的・俗物的觀念の雑炊でしかないという事実をも明白に示すという効果をもっていることが、あきらかになったのである。そこで、わたしは、さらに一步を進めて、こういう性格の攻撃論文をつぎつぎと発表しておられる榊氏やこれと同じ「品性」の「指導的」な「わが国のマルクス・レーニン主義者」たちが、「修正主義」そのものになんて、いったい、どのような「批判」をおこなってきたか、また、こんにち彼らは「修正主義」になんてどのようになんたかっているかということを、事実にもとずいて追究することが、このさい適當でもありまた必要であるとも考える。なぜというに、こうした点まで明確に跡づけることによって、はじめて、榊氏の拙著にたいする攻撃論文の客観的意義をその十分な深さと広がりにおいてとらえることができ、これによって、われわれが当初企図したような正しい意味での批判にすこしでも近づくことができ

るものと期待されるからであり、また、それと同時に、「指導的」な「わが国のマルクス・レーニン主義者」たちの「品性」のあり方について十分に正しい評価を下すに足りる材料が確実に得られるはずであり、かくして、真の統一戦線の確立という当面の緊切な課題に近づくための、重要なひとつの手がかりがあきらかにされるであらうと思われるからである。

榊氏が、拙著にたいする攻撃論文の冒頭において、

「わが国のマルクス・レーニン主義者は、たえず右翼日和見主義、修正主義とたたかうとともに、『左翼』日和見主義、教条主義、セクト主義ともたたかってきた。

とりわけ、この数年来、国の内外でつよく現われてきた現代修正主義にたいしては、先駆的な闘争をおこなってきた。それによって、修正主義の危険な役割と本質はしだいに多くの人びとに理解され、修正主義の理論的実践的破たんもきわめて明瞭になってきた。」

と主張していられることは、さきに本論稿(一)のなかで引用したところであるが、その中で「この数年来、国の内外でつよく現われてきた現代修正主義」と述べられている当の「現代修正主義」の「巨頭」と一般に考えられているものがはかならぬソ連共産党の「指導者」であるエヌ・エス・フルシチョフそのひとであるということとは、いまさら論をまたない。そこで本節では、「フルシチョフ修正主義」をもって「現代修正主義」を代表するものとみなし、この「現代修正主義の巨頭」であるフルシチョフの修正主義思想にたいして、榊氏および氏と同じ「品性」の「指導的」な「わが国のマルクス・レーニン主義者」たちが、はたしてどのようになたか、つてきたか、そしてまた現在かれらはどのようなにとたか、つてい、るか、ということをも、もっぱら事実¹に即して、かれら自身の主張を抛りどころとして、忠実にあとづけて考察してみることしよう。

(1) 本誌第二十一巻第一号(昭和四十二年五月)、二九(三〇)ページ参照。

一九六五年十月になって櫛氏がとくに「現代修正主義」の批判と打倒をめざして書き下された著書、『現代修正主義とはなにか』のなかの「現代修正主義が大きな国際潮流に」と題された第五章には、「フルシチョフの現代修正主義がどのようにして形成され、体系化されていたか」ということに関連して氏が明確に主張していられるつぎのようなくだりが見出される。

- (イ)「修正主義理論が大きく姿をあらわした五六年のソ連共産党第二〇回大会の報告……」(前出、一〇二ページ、傍点―山本)。
- (ロ)「いずれにせよ、一九五〇年代の後半から六〇年にかけてはフルシチョフに代表される現代修正主義の潮流がソ連内ではびこりはじめ、これにともなう政治・イデオロギー上の葛藤も、修正主義批判もあったものの、そのなかで修正主義潮流がジグザグをたどりながらも急速に明瞭な形態をとっていった時期ということができ得るであろう」(前出、一〇〇ページ、傍点―山本)。
- (ハ)「そして、一九六一年一〇月のソ連共産党第二二回大会では、五六年の第二〇回大会当時からいよいよ発展してきたフルシチョフらの修正主義思想がひとつの体系化をとげつつあることが明確化された。周知のように、この大会はいわゆるスターリン批判とアルバニア攻撃が再度大がかりにやられた大会であり、『新しい綱領』が採択された大会であった。このときフルシチョフは、はっきり『われわれは自分の道を歩む』と宣言したのであるが、その後の歴史の経過はこの『自分の道』がいかなるものであるかをいっそう明らかにしていく」(前出、一一〇ページ、傍点およびゴシック体―山本)。

ここにみられるように、「五六年のソ連共産党第二〇回大会の報告」においてフルシチョフの「修正主義理論が大きく姿をあらわした」ということも、「一九六一年一〇月のソ連共産党第二二回大会では、……フルシチョフの修正主義思想がひとつの体系化をとげつつあることが明確化された」ということも、一般に認められている事実であり、すでに一九六三年いらい国際的論争の過程の中で明白にされてきたことでもあり、誰しも異存のないところである。⁽²⁾

(2) 「五六年のソ連共産党第二〇回大会の報告」においてフルシチョフの「現代修正主義理論が大きく姿をあらわした」から

こそ、そしてまたこの『フルシチョフ報告』が各国におけるさまざまな現代修正主義理論のもっとも強力な理論的支柱となっているからこそ、わたしは、拙著『構造改革論批判』の第二章「『平和革命』の理論」全体をこの『フルシチョフ報告』の批判にあて、その修正主義的本質を詳細に論究しているのである。

このように一九六三年いらい明確にされてきた事実をば一九六五年になってやっと櫛氏が指摘されることは、もとより当然のことであって異論をさしはさむ余地はないが、問題は、その「フルシチョフ修正主義」にたいして、櫛氏自身および櫛氏と同じ「品性」をもつ「わが国のマルクス・レーニン主義者」たちが「先駆的に」どのようにたたかっていたかという、た、た、か、い、か、た、そのもののうちにある。

そこで、わたしは、説明の便宜上、まずはじめにソ連共産党第二〇回大会（一九五六年）での『フルシチョフ報告』の中の「修正主義理論が大きく姿をあらわしている」と考えられる箇所をとりだしてその中心的思想を要約してかかげることにし、そのつぎに、この第二〇回大会『報告』にたいする「指導的」な「わが国のマルクス・レーニン主義者」たちの批判がどのようにおこなわれたかということを検討し、さらにソ連共産党第二二回大会での『フルシチョフ報告』および「新しい綱領」についてその問題点を指摘し、これらの『報告』および「新綱領」にたいして、櫛氏および氏と同じ「品性」の持主である「指導的」な「わが国のマルクス・レーニン主義者」たちが、どのように批判を加え、これらとたたかってきたかというのを吟味することからはじめたいとおもう。まず、動かしたい事実にもとづいて、かれらがどのようにたたかってきたかを、客観的に冷静にあとづけてみることに、——これがなにもまして大切なことである。

二

一九五六年ソ連共産党第二〇回大会での『フルシチョフ報告』のなかで、かれの修正主義理論が集約されて示されているのは、その第一章「ソ連邦の国際的地位」のなかの第六節「現在の国際的發展の原則的諸問題」においてである。この第六節全体の内容の理論的・論理的性格の詳細な吟味は、拙著第二章でこれをこころみているが、——あまりに紙数を要するので——本論稿では、その要点だけをとりあげて、櫛氏らの批判のあり方を十分たたく理解するために必要と思われる範囲にとどめて、その概要を書きとめておくことにしたいとおもう。

まず、『フルシチョフ報告』の第一章第六節は、「二つの体制の平和的共存について」、「現在の時期において戦争を未然に防ぐ可能性について」および「さまざまな国における社会主義への移行の形態について」という、三つの小節から成っているものであるが、肝要なことは、これらの三つの小節のそれぞれがまったく違った表題をもっているようにみえながら、その実、内容的にはそれぞれ密接な関連をもっており、とくに、第一小節を「基本」として他の二小節はその「基本」を側面から「合理化する」役割をはたすものとみられるという点を、しかと銘記しておかなければならないということである。

『報告』は、第一小節において、まず「平和的共存」の「原則」が「ソ連邦の対外政策の一般方針」、「社会主義国の対資本主義国の対外政策の基本原則」であるという説明をかかげて、「ソ連邦の侵略的意図」とか「革命の輸出」とかいふブルジョア的「悪宣伝」を封ずる必要を説いているのであるが、その説明につづいてすぐさま出てくるのは、つぎにみられるように「平和共存」こそまさに「世界革命の路線」を考へるばあいの「基本方針」でなければならぬという、いわば「世界革命における戦略規定」なのである。

「われわれが、資本主義と社会主義との二つの体制の競争で社会主義体制が勝利するというとき、それは、この勝利が資本主義

諸国の内政に社会主義諸国が武力で干渉することによってかちとられるという意味では決してない。共產主義の勝利にたいするわれわれの確信は、社会主義的生産様式が資本主義的生産様式にくらべて決定的な優越性をもっていることにもとづいている。まさにこのために、マルクス・レーニン主義の思想が、わが国と人民民主主義諸国の数百万の人々の意識をとらえているのだ。われわれは、世界のすべての勤労者がひとたび共產主義がもっている優越性を納得したあかつきには、おそかれはやかれ社会主義社会の建設のためのたたかいの道にあゆみだすものと確信している。わが国で共產主義を建設するにあたって、われわれは断乎として戦争の勃発に反対する。われわれは、ある一国で新しい社会制度を樹立することは、その国の国民の内政問題であるとなねに主張してきたし、現在もそう主張している。これが偉大なマルクス・レーニン主義の教えにもとづくわれわれの態度である」(傍点—山本)。

ごらんのように、「世界のすべての国を社会主義に変革するという、世界革命運動」の進め方は、つぎのような「基準と順序」にしたがっておこなわれなければならないものとされている。

第一——現在の社会主義先進国(ソ連邦)がなによりもまず、経済力の増強に全精力をそそぐ。これが基本である。そのためには、相当の時間と犠牲とが当然に要求される。その他の資本主義国内部または「後進国」内部で「戦争」に導くおそれのある革命運動のごときは、いっさい「断乎として」おさえねばならぬ。経済建設にはなによりもまず「平和」が必要だからである。

第二——社会主義国および人民民主主義諸国の勤労人民も資本主義国の勤労大衆もみな、「共產主義が資本主義よりも決定的にすぐれている」ということを眼のあたりに見なければ、「マルクス・レーニン主義の思想」をその「意識」の中にとりいれることなどしないものであるから、ソ連邦での経済力の飛躍的な増強が首尾よく達成されて共產主義の決定的優越性が事実をもって示され確認することができるようになったところで、世界のすべての勤労人民は社会主義建設のためのたたかいの道にやつとはじめてあゆみだすことになる。

第三——共産主義の決定的な優越性を眼のあたり見せられ確認できたところでやっと立ちあがった勤労人民大衆は、その「社会主義革命」、「社会主義建設」にあたっても、もちろん、「武力」などの破壊的な方法に訴えてはならないのであって、なによりもまず「民主的・平和的」に社会主義社会をうちたてることを心がけなければならない。「戦争」を誘発するような方法は、厳に慎しманければならない。

ここに示されているのは、まぎれもない反レーニン主義的修正主義理論であって、その中味を簡単に列举すれば、つぎのようなことになるであろう。

(1) 経済力の発展によって、「物資があふれるようにたくさんつくりだされる」ようになることが、社会主義社会を共産主義社会に高めるための、ほとんど唯一の、基本的な方策であるという、共産主義社会についてのおどろくべき小ブル的・俗物的観念。

(2) プロレタリアートも勤労大衆もすべて、物質的利益を第一においてそのためだけに行動するものであって、共産主義社会の決定的優越性を眼のあたりに見るのでなければ、「マルクス・レーニン主義の思想」をその「意識」の中にとり入れるものでもなく、まして社会主義建設のためのたたかいの道になどうてい歩みだすものではないという、徹底した物質的利益第一主義の見方。

(3) 世界共産主義運動において決定的に重要であっていっさいのものに優先させなければならないのは、ソ連邦の共産主義社会建設の事業であって、その建設を保障するためには、「戦争」を誘発する恐れのある革命運動はいっさい慎しむ必要があり、「断乎として」「戦争を防ぎ、平和を守り」ぬき、ソ連邦共産主義社会建設にとって多少ともプラスすると考えられるばあいには、「資本主義諸国家」とも「協力」することを惜しんではないという、臆面も

ない自国の利益優先主義、ソ連邦絶対第一主義。

(3) 『報告』の第一章第六節のこの第一小節の終りの方にかかげられた、「事実、二つの道しかない。一つは平和的共存の道であり、もう一つは歴史上もつとも破壊的な戦争への道である。第三の道はあたえられてない」という一句は、まさに、ソ連邦共産主義社会建設という「基本」にとってなによりも「平和」維持が絶対に必要だということを「合理化する」ためにことさらかけられた、いわば「おどし文句」にはかならないのである。この「第三の道はあたえられていない」という主張が、どんなに事実とかけはなれた、むしろ事実をインペイしてこれを正しくとらえる眼を曇らせるまやかしであるかということ、は、現実の事態と見くらべるだけで誰の目にも明らかであるが、このような文句が、自国の共産主義社会建設絶対第一主義の立場にとっては、しごく当然のこととして映るのである。

(4) 共産主義社会建設にとって必要とあれば、たとえ帝国主義国とでも「信頼」と「協力」の関係をうちたて、その「援助」を受けるべきであるという、この露骨な自国第一主義の考え方は、右の「第三の道はあたえられてない」という文句にすぐつづいて述べられているつぎの文章の中にもはっきり示されている。―曰く「われわれは、社会制度のことなる国々には、ただたんに(?!)たがいにならんで存在できる(?!)ばかりでなく、それ以上のこと(?!)ができると考える。そこからさらにすすんで関係を改善し、諸国間の信頼(?!)をつよめ、協力する(?!)ことが必要である」(傍点および(?!)―山本)。

第一小節において、ソ連共産主義社会建設をば第一の「基本」としておしだし、その「基本」を達成するためこそ「戦争を防ぎ平和を守る」必要と、「戦争に導く恐れのある強力革命をさけて平和的に社会主義的変革をすすめる」必要とがある強調されていたのに対応して、第二小節および第三小節においては、それらの必要を首尾よく達成することができる「諸条件」が現実にととのっているということ、つまり、「戦争を防ぎ平和を守る」可能性と「社会主義革命を平和的になしとげる」可能性とが実在するということが強くおしだされる。つまり、第二および第三小節は、第一小節にかかげられたソ連共産主義社会建設最優先という第一の「基本」を「合理化する」ための「根拠」としてかけられたものとみななければならないのであって、このような関連からみれば、「社会主義の共産主義への移

行の問題」「戦争と平和の問題」および「社会主義への移行の形態の問題」という、世界共産主義運動にとって当面決定的な意義をもつものと考えられる重大な三つの問題も、一箇の「基本」によって「緊密に」関連づけられ、いわば、ひとつの「体系」を成すものとして主張されなければならないものだということが、明瞭にうかがわれるのである。⁽⁵⁾

(5) それゆえ、この重大な三つの問題についての『フルシチョフ報告』の「首尾一貫した」主張について、それらをばらばらにひきはなして、第二と第三の問題についてのフルシチョフの主張は正しいものとしてこれらを全面的に支持しながら、ただし第一の問題についてのフルシチョフの主張は救いがたい誤りを犯しているものだといって非難したり、あるいは、第一と第二の問題についてのフルシチョフの主張は「完全な修正主義」だとしてこれに全面的な「批判」を加えながら、第三の問題についてはフルシチョフの主張する「平和的移行」の「可能性」を——フルシチョフの主張をかりてきたとはおくびにも出さず、自分で創造的につくりあげたものだと呼称して——あれこれ論じたりしてゐる者があつたとすれば、そのことひとつですでに、その論者がまさに「斜視のみとり眼」の持主であることが明示されているだけでなく、さらに、彼自身、フルシチョフの後塵を拝する「論理不貫」の修正主義者であることを表明していることになるのである。

「戦争を防ぎ平和を守る」可能性と「社会主義革命を平和的になしとげる」可能性とが現実存在するという、右の「客観的根拠」を主張するときに前面におしだされてくるのは、いづれも「歴史的、情勢の根本的変化」という、例によって例のごとき「条件」であつて、この「条件」により、マルクス・レーニン主義の「基本原則」は現在ではもはや妥当しなくなつた、「いまや新しい見通しがひらけてきている」のであるという、典型的な修正主義的主張が展開されてくるのである。

第二小節では、フルシチョフはまず、

「よく知られているように、帝国主義が存在するかぎり戦争は不可避であるというマルクス・レーニン主義の命題がある。」

として、「戦争の不可避性の命題」をかかげ、この命題は、

「第一に、帝国主義がすべてを包括する世界的体制であり、第二に、戦争に利益を感じない社会勢力と政治勢力がよわく、貧弱な組織しかもたず、したがって、帝国主義者にたいして戦争を放棄させるだけの力がなかった時期につくられたもの」

であって、そのような「時期」にはその「命題は絶対に正しかった」が、「現在では情勢は根本的に変化している」(傍点—山本)と述べ、この「情勢の根本的变化」をつぎのように説明し、右の「命題」は今日絶対に妥当するものではなくなり、修正されなければならないものになっているとの主張を導きだしてくるのである。

「現在、世界社会主義陣営が存在し、それが絶大な力になっている。平和勢力は、この陣営を通じて、侵略を阻止する精神的な手段ばかりでなく、物質的な手段をもっている。さらに戦争を回避するために積極的に活動している数億にのぼる人口の他の国々(6)の大きな集団がある。資本主義諸国における労働運動は、今日では巨大な力になっている。平和擁護者の運動が生れ、強大な要因に発展している。

こうした情勢のもとでは、帝国主義があるかぎり戦争をひきおこす経済的基礎は存続する(8)というレーニン主義の命題は、もちろん、なお効力をもっている。われわれが最大の警戒心を發揮しなければならないのは、このためである。世界に資本主義がつづくかぎり、資本主義的独占体の利益を代表する反動勢力は、今後も軍事的冒険と侵略をめざす策動をつづけるであろうし、戦争をはじめようとこころみるかもしれない。しかし戦争は、宿命的に避けられないものではない(9)。今日では、帝国主義者が戦争をはじめるのを阻止することができる実質的な手段をもった強大な社会・政治勢力がある。この勢力は、帝国主義が実際に戦争をはじめようとするならば、侵略者に破滅的な反撃を加え、かれらの冒険的な計画を挫折させるだけの力をもっている」(傍点およびゴシック体—山本)。

(6)『報告』第一章第六節の第二小節は、「すでに二つの流血的な世界大戦を経験した人類がこのうえさらに第三次世界大戦を経験しなければならないのだろうか」という「疑問」にたいする「マルクス主義者」の「答え」という形で説きおこされている。社会主義陣営(ソ連邦勢)と帝国主義陣営との間の「世界大戦」をもっぱら問題として、現在、南半球のいたるところで帝国主義者の汚れた手による「局地的」戦争がくりかえされているとき、「帝国主義者が戦争をはじめるのを阻止すること

正しい批判はいかにあるべきか(五)

正しい批判はいかにあるべきか(五)

一二八

ができる」などというおしゃべりが、なんとしらじらしい、自国第一主義の利己的発言であることか！報告の中のこの点については、さきに本論稿の(二)のなかにも引用してかかておいた拙著二〇三—二〇四ページの一節を参照されたい(本誌第二十一巻第二号、三〇—三二ページ)。

(7) このような景気づけの主張がどんなに皮相・一面的であって、誤ったものであるかということは、『帝国主義論』における「労働運動の二つの潮流」についてのレーニンの教示をまつまでもなく、現実の事態を一見しただけでも思い知られるはずである。このような「ためにする」一面的評価にたいしては、やはり、拙著の中からつぎの一節を引いて対照させることが必要であろう。

「右の帝国主義的支配という決定的な要素と関連して、きわめて教訓的なのは、アメリカの中心的な労働組合であるAFLとCIOがアメリカ帝国主義のベトナム侵略戦争を支持する声明を発表したということ、そしてまた、イギリスの労働組合会議(TUC)がアフリカ人労働組合運動の発展をおさえ、イギリス軍隊によるストライキ弾圧を黙認し、民族解放運動の阻止に一役買っているという事実である。AFLとCIOは国務省に協力し、TUCは植民地省に同調する。もっとも中心的な労働組合組織が、数億の勤労人民の強力による抑圧・収奪・殺戮に狂奔しつづける帝国主義者の血まみれの汚れきった手に接吻している。帝国主義の基本的法則——最大限利潤の法則の貫徹の、なんと、きびしく、頑強であることか！」(前出、三一—三二—三三ページ)。

(8) 第二次大戦後の現在、世界資本主義の全般的危機の深化という周知の事態を前にして、「戦争をひきおこす経済的基礎」ばかり論じてているのは、さきにもみた経済力第一主義という小ブル的利己の見地をさらけだしたもので、まったく骨の髄からの反レーニンの曲論といわざるをえない。こんにち世界の隅々で帝国主義者によってひきおこされているか、またはその準備が着々進められているさまざまな「武力行使」つまり戦争が、一にかかって帝国主義の支配体制の崩壊を喰い止めこれを維持・強化するという緊切な政治的必要性にもとづくものであって、経済的必要性のごときはむしろ二次的意義しかもっていないものだということを、ちっともわからないマルクス・レーニン主義者、共産主義者が、いったいあるだろうか！

(9) この「宿命的に避けられないもの」という、フルシチョフの言葉をどうかよく玩味されたい。帝国主義者がその政治的・経済的必要性にとづいて「用意周到に」おしすすめつつある「武力行使」すなわち勤労人民大衆にたいする抑圧戦争をとらえて、あるいはまた、プロレタリアートの前衛部隊の指導のもとに勤労人民が一九となって武器をとってたたかう民族解放戦争

をとらえて、「戦争は宿命的に避けられないものかどうか」などということを問題にすると、なんと、あきればたまたま、とであらうか！ かれは、経済力第一主義、自国の利益第一主義で頭が一つばいになって、そのためにこうした「宿命的かどうか」という問題のたてかたそのものが完全な反レーニン主義的錯乱であることに気がつくことすらできないのである。

右に附記した（６）から（９）までの注によってもあきらかなように、帝国主義の本質および戦争にかんするマルクス・レーニン主義の基本的諸命題は、「情勢の根本的变化」という、まったく現実の事態を誤ってとらえた内容空っぽの「かけ声」の力によって、今日ではその「妥当性」は失われてしまったというように修正され、改ざんされてしまい、「戦争と平和の問題」はいとも手軽に「恒久平和の可能性あり」という妄想で「解決」ずみになってしまうのである。

では、もうひとつの「条件」、すなわち、「社会主義革命を平和的なしとげる可能性」については、報告は、どのような「修正」をこころみているか？ 第三の問題について、節をあらためて考察してみよう。

三

『報告』は、第三小節の冒頭で

「世界の舞台での根本的な変化につれて、諸国と諸民族の社会主義への移行についても、あたらしい見通しがひらけてきている。」

と述べて、はやくもマルクス・レーニン主義の「基本原則」の修正が必然であることを示唆し、ついで、レーニンの論文『マルクス主義の戯画と「帝国主義的経済主義」とについて』（一九一六年）の中からつぎの箇所を引用して、「社会主義への移行の形態」が「さまざま」であるという自分の主張を裏付けるべくこころみている。

正しい批判はいかにあるべきか（五）

「すべての国民は社会主義へ行きつくであろう。それは避けられない。しかし、すべての国民が全く同一のやり方で行きつくとはかぎらない。それぞれの国民は、民主主義のあれこれの形態に、またプロレタリアートの独裁のあれこれの変種に、また社会生活のいろいろの側面の社会主義的改造のあれこれの速度に、独特なものをもたらずである。『史的唯物論の名のもとに』、この点で未来を灰色がかった一色でえがきだすほど、理論的に貧弱で、実践的にこっけいなことはない。これはスズダリ式のぬたくり絵であって、それ以上のものではない」（全集第四版、第二十三巻、五八ページ、傍点—レーニン）。

報告者は、この論文の当該箇所の内容を曲解して、レーニンは「社会主義への移行の形態」には「三つの種類」つまり、「民主主義のあれこれの形態か、またはプロレタリアートの独裁のあれこれの変種か、あるいは社会生活のいろいろの側面の社会主義的改造のあれこれの速度のものか」の「三通り」があつて、いずれかその「一つ」の「形態」を通らなければならないが、どれをとるか一様にきまつたものはありえないということを主張しているものだと思ひこみ、この見当外れの曲解をすぐさま敷衍して、

「歴史の経験は、このレーニンの天才的な命題を完全に確証した。いまでは、社会主義の原則にもとづいて社会を改造する形態には、ソヴェト形態とならんで、人民民主主義の形態がある。」（傍点—山本）

と述べたて、東南欧諸国および中国における「人民民主主義の形態」における「それぞれの国の特殊性と特徴」を指摘して、ただちにつきのような修正主義的主張をかかげているのである。⁽¹¹⁾

「おそらく社会主義への移行の形態はますます多様になるであろう。そのさい、これらの形態の実現にはあらゆる条件のもとで国内戦がともなうとはかぎらない。われわれの敵は、われわれレーニン主義者を、つねにどんな場合にも強力な支持者であるかのようにいいがっている。たしかにわれわれは資本主義社会を社会主義社会に革命的に⁽¹²⁾変革する必要をみつめてゐる。革命的マ

ルクス主義者が改良主義者や日和見主義者とちがうのはこの点である。いくつかの資本主義国では、ブルジョアジー独裁の強力的な覆と、それにともなう階級闘争の激化が避けられないことは、うたがう余地がない、しかし、社会革命の形態にはいろいろある。われわれが、強力と国内戦とを社会変革の唯一の道としてみとめているというのは、¹³⁾事実¹³⁾に反する」(傍点―山本)。

(10) フルシチョフが、この「人民民主主義の形態」のなかにユーゴスラヴィアをふくめ、ユーゴでは「権力が勤労者にぞくし、生産手段の社会的所有が社会の土台になっている」として、「社会主義建設」がすすめられており、「経済管理と国家機関の組織の独特の具体的形態が生れつつある」と主張していることは、きわめて注目に値する。「ユーゴ修正主義への接近・癒着」と神氏がその著書の中で指摘している(前出、九四ページ)現象は、はやくも第二〇回大会の報告においてはっきりと示されているのである。

(11) 「あらゆる条件のもとで」という非論理的な文句は、修正主義者がマルクス・レーニン主義の基本原則を改ざんし修正しようとするときに、必らずといっていいほどくりかえしつかわれる手である。「わが国のマルクス・レーニン主義者」たちも、御多分にもれず、この手をごんごにか頼りにしているのであって、このことは行論において示されるはずである。

(12) 資本主義社会を社会主義社会に変革すること、そのこそがまさに革命なのであって、革命の変革でない変革などというものは、小ブルの頭の中にしか存在しえないものである。それゆえ、「革命的に変革する必要をみとめている」点が改良主義者とのちがいであるという、この主張は、二重の意味で誤りであり、きわめて陰險なものである。資本主義社会は資本家階級があらゆる力と強力をつかって勤労人民を強力的に搾取・収奪し抑圧している体制であって、この体制の変革があらゆる力と強力による以外にはまったく不可能であることは、いまさらいうまでもない。マルクス・レーニン主義者と改良主義者・修正主義者とのわかれ目は、「革命的な変革」などにあるのではなくして、まさにレーニンの明示しているように、「強力と独裁」を唯一の方法として認めるか否かにあるのである。

(13) この「事実」の例として、フルシチョフは、ソヴェト・ロシアについて「一九一七年四月」および「一九一八年の春」をあげ、また「ヨーロッパ人民民主主義諸国」を引合いに出しているが、これらは、いずれも、フルシチョフの執着する「平和的移行」を示すどころか、その反対に、「強力と国内戦こそが社会変革の唯一の道」であることをくりっばに実証しているものばかりである。フルシチョフは、「強力と国内戦」によってはじめてうちたてられた「ソヴェト国家」にたいして「反革命」や「干渉」が「国内戦を組織し」たと述べ、「労働者と農民がよぎなく武器をとるにいたったのは、われわれの罪ではない」な正しい批判はいかにあるべきか(五)

どと弁解がましい言葉を並べているが、この「われわれの罪ではない」という言葉ほど、報告者の根強い小ブル根性をさらけだしたものはない。「誰が、誰を」、「食うか食われるか」という、生死をかけたたたかいを前にして、いったい、誰に向って「われわれの罪ではないんです」などという弁解を並べたてて必要があるというのか？　そういう弁解を並べて小ブル大衆から得られると期待される「同情」が、強力による決戦にとって、敵と味方との決死のたたかいにおいて、いったい、どれだけ、役に立つというのか?!

「革命的マルクス主義者は、強力と国内戦とを社会変革の唯一の道としてみとめているのではない」という、まぎれもない修正主義的主張を「合理化する」ために、報告者は、「強力」について、つぎのような鉄面皮なたわごとを並べたて、「社会主義への移行に強力をつかうかつかわないかは、搾取者階級自身の態度できまるものであって、情勢が不利ならば、かれらは強力をつかうことをひかえるので移行は平和的になされる」といったような論法で、まともに「平和的移行」の可能性をひきだしてくるのである。

「レーニン主義は、支配階級がみずからすすんで権力をゆづることはしない、とおしえている。しかし、闘争がどの程度に烈しくなるか、社会主義への移行に強力をつかうか、つかわないかは、プロレタリアートの態度によってきまるものではなく、むしろ搾取者がどの程度に抵抗するか、搾取者階級自身が強力をつかうかどうかによってきまるのである」。

この臆面もない詭弁がどんなに悪質な、徹底したマルクス・レーニン主義理論の改ざん、その根本的修正であるかということについて、わたしはすでに拙著の中でたちいった論究をこころみているので、ここでは、そのなから当面緊切と思われる箇所にかぎって、つぎに引用してかかげておくことにしよう。

「諸君、よくお聴きいただきたい。『強力 (hackane)』をつかうかつかわないかは、プロレタリアートの態度によってきまるのではなくて、搾取者の反抗の程度によってきまるものだそうである。では、おうかがいするが、『プロレタリアートの独裁』とは、いったい、なんであるか？　レーニンはいう、——『独裁は、直接強力に立脚し、どん

な法律にも拘束されない権力である。プロレタリアートの革命的独裁は、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの強力によってたたかいたいとられ維持される権力であり、どんな法律にも拘束されない権力である』（全集第四版、第二十八巻、二二六ページ）。では、『直接強力に立脚する権力』は、どのようにして獲得されるのか？ 『強力』によ

って以外に、どのようにして獲得されるというのか？

『報告』は『支配階級』、『搾取者』という文字を並べているが、いったい『支配階級』とか『搾取者』は、なにによって勤労人民を搾取し、抑圧し、支配しているのか？ いっ

たい、『強力』なしに、しかも、『武装した強力』なしに、『支配階級』Ⅱ『搾取者』はその支配を維持し、『権力』を保持していることができるか？ では、『武装した強力』によって支えられた『支配階級』の『権力』を打倒して、プ

ロレタリアートの『直接強力にもとづく権力』をうちたててことは、『強力』も『武力闘争』もなしに、どうやっておこなわれるのか？ 勤労大衆が『断固たる決意』を示せば、それで『支配階級』は『強力』をつかわずに『反抗』することなく、『平和』に『革命的変革』（一）に賛成する、とでもいうのか？ 『強力』によってのみ『支配』を維持し

ている当の『支配階級』が『強力』をつかうか、つかわないか、などということが、はたして、問題となりうるであらうか？ 力のあらんかぎり、いっさいの力を傾けて、とくに国際帝国主義の支援のあるかぎり、最後まで自己の『支配』を確保し、革命を挫折させるために『抵抗』してやまないところの『搾取者』をつかまえて、『搾取者』がどの程度に抵抗するか、搾取者階級自身が強力をつかうかどうかなどを問題にするとは、なんという『平和至上主義者』であろうか！ こういう底ぬけの平和至上主義者にたいしては、レーニン自身の明確な教示を対比するのが、なによりである。レーニンは、さきにあげた論文『ソヴェト権力の当面の任務』の中で、つぎのように述べている。

『資本主義から社会主義へ移行するさいにはいつでも二つの主な原因によって、あるいは二つの主な方向におい

て、独裁が必要であることは、確信するに困難でない。第一に、搾取者の反抗を仮借なく弾圧しなくては、資本主義にうちかつて、これを根絶することはできないからである。搾取者からその富を、組織性や知識というその優位を、一挙に奪いとることはできない。したがって、彼らはかならず、かなり長期にわたって、憎らしい貧民の権力を覆そうと企てるだろう。第二に、あらゆる大革命は、とりわけ社会主義革命は、たとえ対外戦争がなかったにしても、対内戦争、すなわち国内戦争なしでは考えられないからである。国内戦は、対外戦争よりもいっそう大きな崩壊を意味し、数千、数百万件にもものぼる動揺や一方の側から他方の側への寝返りを意味し、この上なく不確定な状態、落ちつかない状態、混沌を意味する。そこで、いうまでもなく、旧社会のすべての腐敗分子は、このような深刻な変革のさしには、『その本領を発揮し』ないわけにはいかないのである。だが、腐敗分子が『その本領を発揮する』とは、犯罪や乱暴狼籍、買収や投機、あらゆる種類の醜行が増大すること以外の何物でもあり、えない。それを收拾するには、時間が必要であり、鉄腕が必要なのである。

歴史上の大革命で、人民がこのことを本能的に感じとらなかったり、また泥棒を犯罪の現場で射殺することによって有益な毅然さを示さなかったようなものは、一つもない。……

あらゆる革命のこの歴史的経験、世界史的な―経済的および政治的な―この教訓を、マルクスは総括して、簡単な、鋭い、正確な、明瞭な定式、すなわち、プロレタリアートの独裁という定式にした』(全集第四版、第二十七巻、二三四―二三五ページ傍点―レーニン) (前出、二三八―二三九ページ)。

「闘争がどの程度にはげくなるか、社会主義への移行に強力をつかうか、つかわないか」が「搾取者」自身のやり方によ

ってきまるといふ『断定』をみとめれば、そして、条件^{い、い}しだいによって「搾取者」も「どの程度に抵抗するか、強力をつかうかどうか」を『考慮』することもありうるという『考え方』に立てば、これによって「社会主義への平和的な移行の可能性」はたやすく導きだすことができる。『報告』は、「搾取者」自身によって事がきまるといふ『前提』に立って、すぐさま、「このことに関連して」というようにいともたくみに、議論を進める。

「このことに関連して、議会的手段を用いて社会主義に移行することが、可能かどうかという問題がおこる。最初に社会主義への移行をやりとげたロシアのボルシェヴィキにとっては、このような道はとざされていた。レーニンは別な道、すなわち、ソヴェト共和国の樹立という、当時の歴史的条件のなかでは唯一の正しい道を示した。われわれは、この道をとって世界的な勝利をおさめたのである」。

まずはじめに「移行の道」にはいろいろのものがあつて、「平和的なものも、非平和的なものも」あるということを、レーニンの論文の曲解と改ざんによって述べておき、つぎに、「移行が平和的になるか、強力的になるか」は「搾取者」自身のやり方できまるとの『断定』をあげ、レーニンの場合には、「当時の歴史的條件」に制約されて「ロシアのブルジョア」と国際ブルジョア」とが反革命、干渉、国内戦を組織し⁽¹⁴⁾たので、やむをえず「ソヴェト共和国の樹立」という道をとつたのだと主張する。そこで、「歴史的條件」が「根本的に変化」したという「條件」のもとでは、当然に「議会的手段を用いて社会主義に移行すること」が可能とならなければならないのだ、という「結論」が、たやすくひきだされることになる。

(14) 「移行の道」には、「平和的・民主的」なものか、「強力と国内戦による」ものか、二つに一つしかないことが明らかであるのに、ここでことさら「別な道、すなわちソヴェト共和国の樹立」を述べているのは、全くの誤りであり、意図的なすりかえである。このすりかえを呑みこませるために、第三小節のはじめでレーニンの論文『マルクス主義の戯画と「帝国主義的

「経済主義」とについて』からの引用をあげてこれをことさら曲解、改ざんして、「いまでは、……社会を改造する形態には、ソヴェト形態とならんで、人民民主主義の形態がある」などという、「結論」をひきだしておいてあるのであって、こうした点に、報告者の修正主義的性向の根深さと改ざん者としての狡智のほどが端的に示されているといえるのである。

「搾取者がどの程度に抵抗するか、搾取者階級自身が強力をつかうかどうか」ということを「深刻に」考慮せざるをえなくなるような「歴史的條件の根本的変化」とは、どのようなものか？

「しかしそれ以来、歴史的情勢は根本的に変わり、この問題にたいしてあたらしい態度をとることができるようになった。社会主義と民主主義の勢力は、全世界ではかりしれないほど大きくなり、資本主義ははるかに弱くなった。九億以上の人口をもつ強大な社会主義陣営は成長しつづけており、力をまじつつある。その巨大な内部の力、資本主義にたいする決定的な優越性は、日ごとにいっそうはつきりしてきている。社会主義はすべての国の労働者、農民、インテリゲンチヤをひきつける大きな力となった。社会主義の思想は、真にすべての人々の考えを支配する思想となりはじめている」。

報告は、「この問題にたいしてあたらしい態度をとることができるようになった」と述べているが、「あたらしい態度をとる」のは、これまでの論理にしたがえば、当然に「搾取者階級自身」でなければならない。いったい、どうして「搾取者階級自身」が「あたらしい態度をとることができるようになった」といえるか？ 第一に、ここにあげられている「歴史的情勢の根本的変化」は、事実を誇大に誤認したものであって、とうてい支持されるものではない。「資本主義ははるかに弱くなった」は、一世紀を尺度として考えるばあいのとらえ方であって、事実とは程遠いし、「資本主義にたいする決定的優越性」は、まだまだ「はつきりして」はいない。「すべての国の労働者、農民、インテリゲンチヤ」の中には、アメリカの A F L・CIO、イギリスの T U C は入るのか入らないのか？ アメリカ帝国主義の比較を絶する核武装兵力はどうなったか？ ソ連邦がアメリカやカナダからの小麦の輸入に依存している態たらくで、どこに「決定的優越性」が示されるというのか？ 第二に、「社会主義と民主主義の勢力が大きくなり、社会主義陣営は成長しつづけており、力をまじつつある」

という「歴史的情勢」を前にして、「搾取者階級自身」は、必然的にどのような「あたらしい態度をとらざるをえないか？ いわずと知れたこと、ますますあらゆる力を整備・強化することによって自己の支配体制を確保すること、巨大な軍事的警察的機関を最大限に強化し、搾取・収奪・抑圧のたがをますます強くしめあげること、——これ以外にはありえない。ところが、なんとあきれたことに、報告者は、「歴史的情勢が搾取者階級にとって不利に変わった」ので、「搾取者階級自身どの程度に抵抗するか、強力をつかうかどうか」を再考するようになった、つまり、「抵抗し」ないで、「強力をつかう」ことをやめて、「民主的」な「抵抗」をするようになった、と主張するのである。このような主張が、マルクス・レーニン主義の基本原則にたいする裏切りであり、恥しらずな改ざんであることは、もはやいうまでもないところである。⁽¹⁵⁾

(15) それでもなお、「社会主義への移行に強力をつかうか、つかわないかは、搾取者がどの程度に抵抗するか、搾取者階級自身が強力をつかうかどうかによってきまる」などという、骨の髄から小ブル根性のしみこんだ反レーニンの主張にかぶれている裏切者、修正主義者どもが今日少なからず見受けられるので、念のために、これと真っ向から対立するレーニンの教示をつぎにあげておくことにしよう。ここに引用したのは、さきにかかげた拙著の中の部分にすぐついで述べられている説明である。

「これとまったく同じ思想は、著書『プロレタリア革命と背教者カウツキー』の中でも、うたがう余地なく明確に展開されている。レーニンはそこで、『中心部の蜂起が成功するか、軍隊が反乱を起すばあいには、搾取者を一挙に撃破することができる。しかし、恐らくごく稀な場合を除けば、搾取者を一挙になくす(ничтожить)ことはできない』とし、その根拠として、『搾取者が、変革ののちにも、長い間、不可避免的に、幾多の非常に大きな事実上の優越を保っている』こと、および『搾取者の国際的な結びつきが、非常に大きい』ことをあげ、ここからつぎのような『歴史的真理』を教示しているのである。

『こういう事態であるのに、いくらかでも深刻で重大な革命のさいに、少数者と多数者との関係が、いとも簡単に事を決定するものと予想することは、この上ない低能であり、平凡な自由主義者の愚劣きわまる偏見であり、大衆を欺き、明白な歴史

正しい批判はいかにあるべきか (五)

的真理を大衆にかくすことである。この歴史的真理とは、あらゆる深刻な革命のさいには、多年被搾取者にたいして大きな事実上の優越をたもつ搾取者は、長期の、頑強な、死にもものぐるいの抵抗を示すのが原則である、ということである。おめでたい馬鹿者カウツキーの甘い空想の中でもなければ、搾取者は最後の必死の戦闘で、あるいは一連の戦闘で、自分の優越性をためしてみずに、多数を占める被搾取者の決定に服することは、けつしてしないのである。

資本主義から共産主義への移行は、歴史的な一時代である。この時代が終らない間は、搾取者には必然的に再興の望みが残されていて、この望みは再興の企てに転化する。そして、最初の重大な敗北の後には、自分が打倒されることを予期せず、そうしたことを信せず、またそれについて考えようとさえしなかった、打倒された搾取者どもは、十倍の精力と狂暴な熱情と百倍にも増した憎しみをもち、奪いとられた「楽園」をとりもどすために、今までは非常に楽しい生活をしてきたのに今や「平民の無頼漢」から零落と貧困（あるいは「卑しい労働」の運命を負わされたその家族のために、戦闘に投じる。そして、この資本家である搾取者どもの後ろには、小ブルジョアジーの広汎な大衆がついていく。すべての国の数十年にわたる歴史的経験がこの小ブルジョアジーについて証明しているように、彼らは動揺し、ためらい、今日はプロレタリアートにしたがうが、明日は変革の困難に恐れをなし、労働者が敗北するか、半ば敗走するや否や、あわてふためき、神経過敏となり、いらいらし、悲鳴をあげ、転々としてひとつの陣営から他の陣営へうつる。……わがメンシェヴィキとエス・エルのように。

しかも、事態がこうであるのに、数百年、数千年の特権の存否の問題が歴史によって日程にのぼされる死にもものぐるいの、はげしい戦争の時代に、多数者と少数者、純粹民主主義、独裁の不必要、搾取者と被搾取者との平等を説く!! こういうことをやるには、なんという底なしの低能、はかりしれない俗物根性が必要なことだろう！

だが、一八七一年から一九一四年にいたる比較的「平和な」資本主義の数十年は、日和見主義に順応している社会主義諸党のうちに、俗物根性と狭量と背教とのアウギウスの厩を蓄積したのである』（前出、第二十八巻、二三二—二三四ページ、傍点レーニン）。

われわれは、このレーニンの最後の文章の趣旨に準じて、同じくつぎのようことができるであらう。——『第二次世界大戦終結以後における社会主義および資本主義の比較的「平和な」発展の数十年は、マルクス・レーニン主義の真髄を把握しえない、小ブル的偏向に毒されたマルクス主義諸党のうちに、俗物根性と修正主義と背教とのアウギウスの厩を蓄積したのである』と。

「歴史的情勢の根本的变化」の第一にあげられた「社会主義と民主主義の勢力は、全世界ではかりしれないほど大きくなり、資本主義ははるかに弱くなった」という、「国際的条件」とならんで、第二にあげられなければならないのは、いうまでもなく、「国内的条件」であって、ここでは、つぎのように、労働者階級を指導勢力とした広汎な勤労大衆の「統一戦線」の結成によって、「議會的手段を用いて」首尾よく「社会主義への平和的な移行」が保証されるという「可能性」が示される。

「同時に、現在の諸条件のもとで、いくつかの資本主義諸国の労働者階級は、国民の圧倒的多数をその指導のもとに統一し、基本的な生産手段を人民の手にうつす現実的な可能性をもっている。右翼ブルジョア政党とその政府は、ますますひんばんに破産状態におちいつている。こうした情勢のなかでは、労働者階級は、勤労農民とインテリゲンチヤとすべての愛国勢力とを自分のまわりに結集し、資本家・地主と妥協する政策をすてきれないでいる日和見分子を断乎としてしりぞけながら、人民の利益に刃むかう反動勢力をうちまかし、議會内で安定した多数をしめ、議會をブルジョア民主主義の機関から真に人民の意思を代表する道具にかえる可能性をもっている。このような場合、多くの高度に発達した資本主義国で伝統になっているこの機関は、真の民主主義、勤労人民のための民主主義の機関となることができる。

プロレタリアートとすべての勤労者との大衆的革命運動に支えられて議會内で安定した多数を獲得できれば、いくつかの資本主義国やかつての植民地諸国の労働者階級にとって、根本的な社会変革の遂行を保証する諸条件がつくりだされるであろう。

資本主義がまだ強く、巨大な軍事的警察的機関を資本家が握っている国々では、反動勢力はもちろん、激しく抵抗するにちがいない。そこでは、社会主義への移行は、激しい階級闘争、革命闘争をともなうであろう。

社会主義への移行の形態はどうあらうとも、決定的で欠くことのできない条件は、その前衛を先頭にたてた労働者階級の政治的指導である。それなくしては社会主義への移行はできない」。

ちょっとみると、この「国内的条件」はきわめて簡単のようであるが、しかし、すこしく注意してみると、けっこう簡単・容易なものではなく、はなはだ複雑・困難なものであることがわかる。いま、右の「国内的条件」を、わか

りやすいように、箇条書きにして列挙してみよう。

第一、右翼ブルジョア政党とその政府が、ますますひんぱんに破産におちいつていること。

第二、労働者階級全体が、その前衛によって統率され指導されて一箇の統一ある革命勢力に結集していること。

第三、労働者階級は、国民の圧倒的多数をその指導のもとに統一し、革命的な統一戦線が首尾よく結成され、きわめて強力になっていること。

第四、資本家・地主と妥協している日和見分子と人民の利益に刃むかう反動勢力とは、国民のほんの少数を占めるにすぎないこと。

第五、労働者階級の指導する革命勢力が、議会内で安定した多数を、つまりびくともしない過半数を、占めること。

第六、議会で安定した多数を占めることによって成立した革命的統一戦線政府による「根本的な社会変革の遂行」にたいして、「搾取者階級自身が抵抗することをひかえ、強力をつかうことを断念し」て、おとなしく平和的に、「革命的変革」をうけいれること。

第七、「資本主義がまだ強く、巨大な軍事的警察的機関を資本家が握っている」ということがないこと。

ごらんのように、第一から第七にいたるまで、どの「条件」をとってみても、きわめて容易なものではないことが、ほとんど現実にあリえないものであることが、わかる。ところが、これらの「条件」のどれかひとつが欠けても、それは他の諸「条件」に決定的な影響をあたえ、「社会主義への平和的な移行」はその「可能性」を失ってしまうということになる。

たとえば、第七の「条件」をとってみよう。第二次世界大戦後において、およそ独占資本主義の段階に到達してい

る資本主義国で、その支配体制の維持・強化に必要な「巨大な軍事的警察的機関を資本家が握っていないような国が、ひとつでもあるだろうか？　その当該国の資本家が直接に握っていない国でも、「世界の憲兵」といわれるアメリカ帝国主義の「巨大な軍事的警察的機構」が「カサ」となって、これを十二分に補完し、保証している。第六の「条件」がとうてい不可能であることは、さきに引用したレーニンの指摘に照らしても、明白である。第六、第七の「条件」が現実「欠如」しているという「歴史的情勢」のもとでは、「平和的移行」はまったく不可能である。だが、第六、第七のみではない。第一から第五までの「条件」にしても、現実とはきわめて程遠いものである。事実についてみるならば、第二から第五までの「条件」は、いまだかつて実在したためしのないものばかりである。

このようにみえてくると、『報告』は、まったくありもしない、虚偽の「歴史的情勢の根本的変化」——「国際的条件」と「国内的条件」との両者についての「根本的変化」——という「理由」をあげて、マルクス・レーニン主義の基本原則である「強力と国内戦の道」が現在では正しいものでなくなった、今日ではこの基本原則にかわって、新しい「別な道」、すなわち「平和的な、議会的な道」こそが正しい道になったのだというように主張して、基本原則の根本的修正、その完全な改ざんを「合理化する」ことに力を傾けている、ということが明白となるのである。一方で「多くの高度に発達した資本主義国」では「議会の道、平和的な移行」が可能であるとの主張をかげながら、他方では、「資本主義がまだ強く、巨大な軍事的警察的機関を資本家が握っている国々」では「激しい階級闘争」、「強力と国内戦の道」が避けられないと主張するという、明白な自家撞着にすら気がついていないということは、報告者たちが、自国の共産主義社会建設最優先主義の完全なとりことなって、いかにマルクス・レーニン主義の基本原則を忘れはて、ふみにじってしかも恬として恥じないかということを示す一つの証左にすぎない。⁽¹⁶⁾

正しい批判はいかにあるべきか(五)

一四二

(16) この大会においてスターリン批判が展開されたことは周知のところであるが、その批判の中心は、「個人崇拜」という、きわめてアイマイな言葉の上におかれていたものである。「個人崇拜」は、「自主独立」などという言葉と全く同様に、なんら実質的内容を示すものではなく、したがって、いかようにでも解釈されるものであって、科学的な用語ではありえない。ところで、主観的にはスターリンを批判しているとはいへ、客観的にみるならば、報告者たちは、重大な二点において、スターリンの轍をそっくりそのまま踏んでいるもので、まさにスターリンの考え方の追従者となっている。その第一点は、ソ連邦においては、すでに一九三六年スターリン憲法の発布いらい、国内においては階級的矛盾は根絶した、これからは経済力の発展によって容易に社会主義社会から共產主義社会にうつれるのだという考え方であり、第二点は、「歴史的情勢は根本的にかわり、資本主義ははるかに弱くなった」という、資本主義発展停止論である。この重要な二点においてスターリンに追従し、誤った考え方を固執していながら、しかもスターリンの「個人崇拜」なるものを攻撃し、その上に、「強力と国内戦の道」を否定して「平和的・議会的方法」をもちこむという、おどろくべき修正と改ざんを強行しているのが、この『報告』の実体なのである。

さて、以上の説明によって、第二〇回大会での『フルシチョフ報告』のきわだった修正主義的性格は、およそあきらかにされたことと思われるが、このような『報告』にたいして、榊氏および氏と同じ「品性」の「わが国のマルクス・レーニン主義者」たちが、じっさい、どのような批判をおこなってきているか、ということをつぎに簡単に吟味してみることしよう。

四

榊氏らがフルシチョフ修正主義とどのようにたたかっているかということをも十分詳細に考察するためには「赤旗」その他様々な種類の機関紙、パンフレット等々についてもめなく眼を通して必要な資料を総括しなければならぬが、しかし、当面、榊氏らのフルシチョフ修正主義にたいするたたかい方の基本的性格をとらえるためには、そう

した詳細・綿密な考察は不必要と思われる。若干の主要な文献をとりだしてその特徴を的確に把握することによって、当面の目的は十分達成されるはずである。そこで以下の考察においては、榊氏および氏と同じ「品性」の「わが国のマルクス・レーニン主義者」たちのフルシチョフ修正主義にたいするたかい方の基本的性格を端的に示していると考えられる、いわば劃期的な著作だけをとりだして、これを吟味することにしいたいと考える。その意味において、第一にとりあげられなければならないのは、本論稿の(一)において指摘された「前衛」第一八二号(一九六一年六月)の巻頭論文、『日本の「構造的改革論」者によるマルクス＝レーニン主義のわい曲』である。

「わが国のマルクス・レーニン主義者」の最高「指導者」の一人、袴田里見氏によって書かれたこの論文、ソ連共産党第二〇回大会からおよそ五年たつて、「日本共産党中央委員会理論政治誌」である「前衛」の巻頭に載せられたこの論文は、いったい、第二〇回大会での『フルシチョフ報告』をどのように批判しているであろうか？ それは、『フルシチョフ報告』を批判しているものでもなく、いわんや、これとたたかっているものなどではさらさらなく、なんと、これを完全なマルクス・レーニン主義理論であると主張し、この『報告』の内容を全面的に支持し、さらにフルシチョフ流に、つまり修正主義的方向にこれをいっそうおしすすめて解釈しているものなのである。この点は、すでに本論稿の(一)および(二)でかなりに説明が与えられているので、ここでは、この袴田論文の主張する基本線を簡潔に——簡条書きに——書きとめておくことにしよう。

(一) 「ソ連共産党第二〇回大会でのフルシチョフ同志の中央委員会報告における『革命の平和的移行』に関する部分」は、完全にすぐれたマルクス・レーニン主義理論である。

(二) 「イタリアの道」は、イタリア革命にとって完全に正しい路線である。

正しい批判はいかにあるべきか(五)

(三) 報告の中の「資本主義がまだ強く、巨大な軍事的警察的機関を資本家が握っている国々では、反動勢力は、もちろん、激しく抵抗するにちがいない。そこでは、社会主義への移行は、激しい階級闘争、革命闘争を伴うであろう。」というくだりについて、「激しい階級闘争、革命闘争」といえばただちに「武力革命」だとするのは、もちろん、間違ひである。

(四) 「平和的競争」によって社会主義の優位をかちとっていくという世界革命の方針は、完全に正しいものである。

(五) 日本の「構造政革論」者の主張の主要な誤りは、第一に、「イタリーの道」を「発達した資本主義諸国の普遍的な社会主義への接近形態」と見なしているところであり、第二には、日本の対米従属を正視していない点であり、第三に、国家独占資本主義における「下部構造」と「上部構造」の「変化」を主張している点である。

右のうち、フルシチョフ修正主義理論をさらにいっそうおしすすめたものとして、(二)について、若干注釈を加えておくのはむだではないであろう。そのためにまず、右の(五)の第二点、つまり日本の対米従属をどのようにこの論文が強調しているか示す二、三の箇所を、つぎに引用してかかげてみよう。

①「アメリカ帝国主義が、南ベトナムやラオスとくに生々しい最近のキューバにたいしてとった、またとらうとしている強盗的な侵略行動は、これらの国々にが発達していない資本主義だからそのようなことがやれたのであると単純にいうことができるであろうか。かりにもしも、資本主義の発達した日本において労働者階級が幾百万の人民とともに、日本の独占資本に攻撃を集中して独占資本の政治的支配と、経済的搾取と収奪の体制をくつがえす事態がおきているとき、果してアメリカ帝国主義は手をこまねいて見ていると『構造政革論』者は考えているのであろうか。日本はアメリカ帝国主義にとっては、極東における最大の軍事拠点であって、経済的にもアメリカ資本主義経済の腐朽が深化するにしがって、搾取と収奪の面で彼らにとっては日本はますます重要な比重をしめるようになってきている。アメリカ帝国主義は彼らが日本から完全に撤退すれば、日本独占資本が民主勢力にたいして十分たうちうがでなくなることを恐れており、またアメリカが去ったのちに日本の独占資本がアメリカとかつてのように強力

な競争相手になることにたいしても日本からの撤退など容易に承認しようとはしていないのである。アメリカ帝国主義は、これまでもそうであったように、今後においても日本から一步も退却せずに日本の売国的独占資本とともに、政治的・経済的・軍事的支配を続けようとしている」(前出、六ページ、傍点―山本)。

②『構造改革論』者よ。諸君は、これらの事実や貿易為替の自由化の実施段階になった今日急速にアメリカ独占資本の投資が大規模におこなわれるようになっていくことや、またアメリカ資本がどしどし侵入するようになってきてから日本政府と独占資本が、労働者階級に対する弾圧をますます強化してきた事実を正視しているのか。

『構造改革論』者の諸論文が、このようなアメリカ帝国主義が日本の人民におよぼしているところの支配について具体的に取り上げないのははなはだ不可解なことである。彼らが故意に、この一六六年間日本の人民を支配し収奪し、この期間に幾万人の日本人を殺りくし、凌じよくし、略奪と破壊をこうむらせたアメリカ帝国主義を日本人の主要な敵として認めないからこそ、彼らはわが党を攻撃したトロツキストと同じように、米日反動の手に握られているブルジョア・ジャーナリズムから声援を受けているのである。

『モスクワ声明』は、はっきりとアメリカ帝国主義の侵略性と暴虐性を陰べいする人びとを修正主義者として糾弾している。修正主義はユーゴスラビヤだけの専売特許ではない。こんにち、日本でいわゆる『構造改革論』なるものを積極的にふりまいている人びとこそ、日本版の修正主義者なのである」(前出、七ページ、傍点―山本)。

(17)『フルンチョフ報告』がユーゴを社会主義への移行の一つの形態、人民民主主義のひとつの形態として例示していることは、さきにも指摘しておいたが、袴田論文は、この点について一言もふれずに、ここでユーゴを「修正主義」ときめつけている。「修正主義」ユーゴを正統な社会主義の一形態と称揚している『報告』も同様に、当然「修正主義」であるはずであるが、この点を見逃して、『報告』を全面的に完全なマルクス・レーニン主義だと称しているところに、「自主独立」ならぬ対外従従分子的性向が顯示されている。

③「日本に現実にあるのは独占資本がますます強化して中小企業までも系列化し、中小企業をも収奪する過程が進行しているであり、上部構造においては独占資本が国家機構を事実上手中におさめ、これをアメリカ帝国主義と自己に従属させて、民主主義の発展どころか民主主義をますます制限する方向に進んでいるということである」(前出、一〇ページ、傍点―山本)。

ごらんのように、日本では「独占資本の政治的支配と経済的搾取と収奪の体制」が整備され強化され、アメリカ帝国主

義は「日本から一歩も退却せずに、政治的・経済的・軍事的支配を続け」ており、「独占資本がますます強化して中小企業までも系列化し」、「国家機構を事実上その手中におさめ」、「民主主義をますます制限する方向に進んでおり」、さらにアメリカ帝国主義は「この一六年間日本の人民を支配し収奪し、この期間に幾万人の日本人を殺りくし、凌じよくし、略奪と破壊をこうむらせ」てきているというのに、しかも、『フルシチョフ報告』でさえ、明白に「激しい階級闘争や革命闘争は避けられない」といっているのに、おまけに、御本人自身、「強力をつかうかつかわないかは、搾取者階級自身が強力をつかうかつかわないか、彼らの態度でできる」と言っている当の「搾取者」がますます「強力」をつかって「政治的支配と搾取・収奪を強化している」と主張しているながら、なおかつ、「フルシチョフ同志」の主張をさらにいっそう修正主義的方向におしすすめ、このような事態のもとでも、「強力と国内戦の道」は支持できない、「平和的・議会的方法」によることが必要だと、袴田氏は力説強調していられるのである。

㊦「フルシチョフ同志が二〇回大会のべているように、反動勢力が軍隊、警察等の強大な権力機構を握って人民を弾圧する国々においては激しい階級闘争や革命闘争を覚悟しなければならないのである。日本共産党は、日本のアメリカ帝国主義よりの独立、日本の売国的独占資本の支配をうち倒す民主主義革命を、武装蜂起によって達成しようと計画をたてていると速断してはならない」(前出、一三ページ、傍点—山本)

㊧「このたび党中央委員会が発表した『日本共産党綱領草案』と『政治報告草案』が明らかにしているように日本人民の主要な敵を打倒するという目標は、きたるべき革命の戦略的目標であって、日本人民の激しい革命によってのみ達成されることを明らかにしている。すなわち、人民の権力をうちたてることがなくてはできないのだ」(前出、一四ページ)。

この㊦中の「激しい革命」という言葉は、さきの『フルシチョフ報告』の中の「資本主義社会を社会主義社会に革命的に、変革する必要をみとめる」という「革命的マルクス主義者」の「特徴づけ」のさいの「革命的に」という言葉と、まさに好一対である。「激しい革命」、「人民の権力をうちたてる革命」、——だが、それは、なんと、「強力」をともしなわな

命、「議会で安定した多数を得れば」という「棚ボタ式仮定」によってはじめてうごきだす革命なのである！

なお、ここで、この袴田論文の中で、とくにわれわれの注意を惹くつぎの一句をぜひとも挙げておく必要がある。それは、五ページ上段一九行目にはっきり示されているつぎの言葉である。

「私は八一カ国会議に参加した日本共産党代表団長として……」。

一九五六年から四年の後の一九六〇年八一カ国会議に「日本共産党代表団長として」出席された袴田里見氏は、一九六一年六月の「前衛」第一八二号で、ごらんのように、一九五六年ソ連共産党第二〇回大会の『フルシチョフ報告』を完全にマルクス・レーニン主義に合致したものと明確に主張されているのである。袴田氏のこの明確な断定どおり、一ヶ月後、日本共産党第八回大会は、『フルシチョフ報告』の修正主義的理論をそっくりそのままとり入れた「日本共産党綱領」を決定し、さらにそれから三ヶ月もたたないうちに、野坂氏を団長とする日本共産党代表団がソ連共産党第二二回大会に出席して「フルシチョフ同志」に熱烈な挨拶をおくり、フルシチョフ修正主義の完全な「体系化」といわれる「ソ連共産党新綱領」を衷心から歓迎し、あとでみられるように、同年「前衛」十二月号には袴田里見氏が、翌年一月号には榊利夫氏が、いずれも右の「新綱領」にたいする献身的な絶讃の辞を連ねた論文を、つぎつぎと発表していられるのである。それゆえ、一九六〇年八一カ国会議に団長として出席された袴田氏以下の面々が、その会議の席上で、フルシチョフ修正主義とたたかうどころか、これを完全にマルクス・レーニン主義に合致したものと断定して、はじめからおわりまで衷心から賛同し追従したであろうことは、寸分の疑いをいれる余地もない。第二〇回大会から第二二回大会まで、つまり一九五六年から一九六一年末まで、一貫して、フルシチョフ修正主義理論を完全なマルクス・レーニン主義理論だと熱烈に主張していられる当の袴田里見氏が、一九六〇年団長として八一カ国

会議に出席していられたという事実が、このように袴田氏自身の論文の中で氏自身の筆によって明示されているのであるが、この明白なひとつの事実によって、榊利夫氏が本論稿（一）への反駁として「学生新聞」紙上に公表された再攻撃論文『拙劣な議論はどんな実効をもつか』（四）わが党の先駆性を傷けることはできない」の中で臆面もなく述べたてていられるつぎの一節が、榊氏自身の底知らずのうそつき、ペテン、捏造癖をこの上もなくよく実証しているということが、いやおうなしにあかるみに出てくるのである。

「わが党はこの主として国内での闘争をやるだけでなく、フルシチョフに代表される修正主義の国際潮流にたいする理論闘争でも大きな力を発揮した。それは、たとえば、はやくも一九六〇年の八一カ国共産党・労働者党代表者会議でわが党代表が八十以上にもおよぶ修正案を提起し、会議の『声明』をマルクス・レーニン主義の原則にかなったものとするために奮闘したことをあげただけでもあきらかであろう」。

一九六一年末までフルシチョフ理論を完全なマルクス・レーニン主義理論だと思いこみ、そのようなものだと説明してまわり、フルシチョフ理論を要めとした「綱領」を自分たちできめていたという事実が、なんと、わが榊氏の例によって「あとからいつでも妥当に訂正できる」という「品性」と「手法」にかかると、たちまち、「はやくも一九六〇年の八一カ国会議」で「フルシチョフ修正主義と闘争し」、「フルシチョフ修正主義に毒された八十以上におよぶ箇所の修正案を提起し」、「マルクス・レーニン主義の原則にかなったものにするために、フルシチョフ修正主義とたたかった、奮闘した」という、全くあべこべの、まことしやかな「事実」にデッチあげられてしまうのである！！

五

「わが国のマルクス・レーニン主義者」、とくにその「指導者」たちが、どのようにフルシチョフ修正主義とたた

かつてきたかを示す顕著な歴史的事例の第二としては、袴田氏によるさきの「前衛」巻頭論文の発表と前後して決定された「日本共産党綱領」である。この「日本共産党綱領」は、その決定をみるより三年前、一九五七年に「党章草案」としてすでに作成されていたものであって、ほとんど修正なしに、一九六〇年に本きまりとなったものである。この「党章草案」および「綱領」が、一九五六年ソ連共産党第二〇回大会での『フルシチョフ報告』によって明確にうちだされた「世界革命」の「路線」に忠実に追従し、これに完全に同調して、むしろこれを唯一の理論的支柱としてつくりあげられたものであることは、前節で指摘した歴史的事実、関係によっても十分うかがうことができるが、念のため、その具体的内容について、事実どうなっているかを、すこしく検証してみることにしてしよう。「党章草案」および「綱領」（両者はほとんど同じものなので、これからは正式決定をみた「綱領」をもって同時に「党章草案」をも示すものということにしてしよう）の中で、第二〇回大会での『フルシチョフ報告』の「理論」をそのままとりいられていることが明瞭に示されているのは、やはり、「社会主義への移行の形態」について述べられている部分——「綱領」の（四）——である。いまその中の代表的な箇所を引用してかかげてみよう（①②③④⑤⑥は後段での説明の便宜上、山本のつけたもの）。

「①日米支配層の弾圧、破壊、分裂工作、反共主義をはじめ各種の思想攻撃などたたかいたがら遂行されるこの偉大な闘争で、党は人民大衆とかたくむすびつき、その先頭にたって先進的役割をはたさなければならない。そして、とくに労働者階級をマルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義の思想でたかめ、わが国の民主革命の勝利と社会主義の最後の勝利を確信させ、その階級的戦闘性と政治的指導力をつよめる。それとともに農民の多数を党の指導のもとに結集して、民族統一戦線の基礎をなす労働者、農民の階級的同盟を確立しなければならない。民族民主統一戦線の発展において、決定的に重要な条件は、わが党を拡大強化し、その政治的指導力をつよめ、強大な大衆的前衛党を建設することである。

②この闘争において党と労働者階級の指導する民族民主統一戦線勢力が積極的に国会の議席をしめ、国会外の大衆闘争とむすびついてたかうことは、重要である。国会で安定した過半数をしめることができるならば、国会を反動支配の道具から人民に奉仕

する道具にかえ、革命の条件をさらに有利にすることができる。

③党は、人民を民族民主統一戦線に結集し、その基礎のうえに政府をつくるために奮闘する。……そして、一定の条件があるならば、民主勢力がさしあたって一致できる目標の範囲でも、統一戦線政府をつくるためにたたかい、民族民主統一戦線政府の樹立を促進するために努力する。

④民族民主統一戦線のうえにたつ政府をつくることは、アメリカ帝国主義と日本反動勢力のあらゆる妨害に抗しての闘争である。この政府が革命の政府になるかどうかは、それをささえる民族民主統一戦線の力の成長の程度にかかっている。……

⑤党と労働者階級の指導的役割が十分に發揮されて、アメリカ帝国主義と日本独占資本に反対する強大な民族民主統一戦線が發展し、反民族的・反人民的勢力を敗北させるならば、そのうえにたつ民族民主統一戦線政府は革命の政府となり、わが国の独占資本を中心とする売国的反動支配をたおし、わが国からアメリカ帝国主義をおいはらって、主権を回復し人民の手に権力をにぎることができる。労働者、農民を中心とする人民の民主連合独裁の性格をもつこの権力は、世界の平和、民主主義、社会主義の勢力と連帯して独立と民主主義の任務をなしとげ、独占資本の政治的経済的支配の復活を阻止し、君主制を廃止し、反動的國家機構を根本的に変革して人民共和國をつくり、名実ともに国会を國の最高機関とする人民の民主主義國家体制を確立する」（傍点およびゴシック体——山本）。

ここに引用した箇所を、さきに本稿の「三」で引用した『フルシチョフ報告』の中の、「同時に、現在の諸条件のもとで……」にはじまって「それなくしては社会主義への移行はできない。」という文章におわる一節の内容とよく読みあわせるならば、前者が後者の内容をそっくりそのままとりいれてこれを忠実に敷衍しただけのものであるということが、疑う余地なくあきらかとなってくる。そして、この「忠実な追隨と引き写し」という事實は、すぐあとでみられるように、「わが國のマルクス・レーニン主義者」のうちの「最高指導者」と目される宮本顕治氏の「綱領」にかんする報告の中の数々の懇切な説明によっても、明瞭に裏書きされているのである。だが、そのまゝに、まず、右に引用した「綱領」部分が『フルシチョフ報告』の該当箇所をどのようにとりいれ、引き写しているかということを、その文面につ

いて簡単にたしかめておくことにしよう。

一 ①の中でくりかえし述べたてられている「政治的指導力」という言葉は、『フルシチョフ報告』の該當箇所の最後にある「……決定的で欠くことのできない条件は、その前衛を先頭にたてた労働者階級の政治的指導である。」からとったものと思われる。だが、これまで詳細にみてきたように、「勤労大衆の生活体験、闘争経験」からでてくるものが「もっとも真理に近い」と称して「労働の量と質に応じての賃銀」とか、「人民全体の生活と福祉の向上を保証する最賃制」とかいったような、まぎれもない俗物的反動的スローガンをかかげて大衆引廻し、大衆追随主義に終始しているような「品性」の持主が、いったい、どういう「政治的指導力」を、どのように「つよめる」というのか？「『マルクス主義の主要内容』たる経済理論の基本的諸命題についての完全無欠な無知、価値・価格および賃銀についてのブルジョア的な粗雑な観念への執着という事実を公然と表明」⁽¹⁸⁾している人々が、どうやって「労働者階級をマルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義の思想でたかめ」ようというのか？「プロレタリア国際主義」にもいろいろある。自国の共産主義社会建設をいっさいのものに優先して第一位におきそのために、全世界のプロレタリアに「平和擁護」を呼びかけるのも、りっぱにひとつの「プロレタリア国際主義」であり、この自国共産主義社会建設最優先主義と結びついた括弧つきの「プロレタリア国際主義」を唱えているのが、『フルシチョフ報告』であって、この『報告』に追随しこれに忠実に従がう「わが国のマルクス・レーニン主義者」の唱える「国際主義」が、その「品性」にふさわしく、フルシチョフ式「国際主義」と瓜二つでなければならないのも、また法則のいたすところ、理の当然でなければならない。

(18) 本論稿(三)の「六」(昭和四十二年十二月、本誌第二十一卷第三号、五九ページ)を参照。

二 ②の「国会で安定した過半数をしめることができるならば、国会を反動支配の道具から人民に奉仕する道具にかえ、革命の正しい批判はいかにあるべきか(五)

条件をさらに有利にすることができる。」のくだりが、『フルシチョフ報告』の完全無欠な引き写しであり、『報告』の「……議会内で安定した多数⁽¹⁹⁾をしめ、議会をブルジョア民主主義の機関から真に人民の意志を代表する道具にかえる。」という箇所と、

「……議会内で安定した多数を獲得できれば……根本的な社会変革の遂行を保証する諸条件ががつくりだされるだろう……」という箇所とを「適当につきまぜて」作文したものであることは、なんらの疑いもない。

(19) 『報告』の「多数」は Большинство であって、「過半数」と全く同じである。

ただ、さらに柳氏がレーニンの論文から無断借用つまり剽窃したところについて検証したさいにあきらかにされたように、最も大切な論点について、完全な引写し、つまり「創造的な」剽窃で事をすましているような論者は、きまつて、原作者の一貫した思想内容を歪め、その内容をさらにいっそう混乱したものにおきかえることになっているのである。この場合にも、右の法則は完全に妥当する。

(20) 本論稿(三)の追記の「六」(本誌第二十一卷第三号、七五ページ)参照。

第一に、『フルシチョフ報告』は、ソ連邦以外の多数の「資本主義国やかつての植民地諸国」を問題としているのであって、それらは「諸条件」がさまざまであり、一方の「資本主義がまだ強く、巨大な軍事的警察的機関を資本家が握っている国々」では、「社会主義への移行」は「強力と国内戦の道」によらなければならないが、そうでない国々には「平和的な、議会的な方法」による「可能性」があるのであって、後者の国々には、「条件によって、もしブルジョア議会で安定した過半数をしめることができるならば」「ブルジョア議會を人民の意志を代表する道具にかえる可能性」があると、主張しているのである。二つの「道」が「適用」される場合を論じているのであるから、当然、一方にたいして、他方は、「過半数をしめることができた場合には」という説明にならなければならない。(もっとも、

この他方の「場合」を想定してその「可能性」を主張することが完全な反レーニンの改ざんであるということは、すでに論証したとおりである。だが、「日本共産党綱領」は、さまざまな諸条件をもついろいろな国について「社会主義へ移行する道」を説明しているものではなく、決してない。それは、ただ日本一国だけについて、その特定の、歴史的「諸条件」が現実にとのようになっているかを具体的に明確に分析して、その分析の上になつて、当面する日本での「社会主義への道」は、これこれでないといけない、これこれの「道」こそが現在の「諸条件」のもとで唯一の正しい「道」である、ということをはつきり指し示すものでなければならぬ。現在日本資本主義の「諸条件」——客観的諸条件および主体的諸条件——はこれこれのとおりであり、これらによつて規定された当面唯一の正しい「変革の道」はかくかくでなければならないのであつて、われわれは、その唯一の正しい「道」にそつて完全な勝利を勝ちとるために、全責任を負ひ、断乎としてこれこれの方策をおしすすめ、たたかいぬくものである。——これこそが、マルクス・レーニン主義の理論で完全に武装した真の前衛党の綱領でなければならない。ところが、なんと、あきれたことに、「わが国のマルクス・レーニン主義者」たちは、「諸条件」をなにひとつ明示することなく、いきなり「国会で安定した過半数をしめることができるならば」という、まったくの仮定をならべて、奇蹟以上にありえないこの仮定をもとにして、そこからつぎつぎと「革命的方策」がつづいて導き出されてきて最後に「社会主義への移行」が完了するという、仮空の筋書きを並べたててゐるのである。独占資本主義、とくに国家独占資本主義のもとで、革命勢力が「ブルジョア議会で安定した過半数をしめる」ということは、すでに革命勢力が反革命勢力を完全に圧倒しており、反革命権力を打倒して革命権力をうちたてることが可能かつ必然になつてゐるという状態をいいあらわしたものにすぎないが、しかし、このように革命勢力が反革命勢力を圧倒して国家権力を奪取しうるまでに整備・強化されている状

態のもとでは、「ブルジョア議会で安定した過半数をしめる」ことなどもはや緊切な問題にはならなくなっているはずであり、また、他方からいえば、「なによりもまず『ブルジョア議会で安定した過半数をしめることができるならば』という仮定を第一の目標としてその仮定から出発して」革命権力をうちたてうる方向にすすむというやり方を主張するというのは、とりもなおさず、すでに勝利を十分獲得できる条件が、できあがっている状態を前提して、その仮定から出発して勝利を獲得できる状態をめざしてすすむべきだと説くのとまったく同じで、みえすいた子供だましのトオトロギー論法というのほかない。国家独占資本主義のもとで革命勢力が「ブルジョア議会で安定した過半数をしめる」ことは、歴史的に与えられた現在のあらゆる条件のもとで、絶対にありえないし、またそういう「道」の可能性をかりにも主張したりするのは「底なしの低能、はかりしれない俗物根性」（レーニン）であり、マルクス・レーニン主義にたいする恥しらずな裏切りであるというのが、レーニンの明示するところであるが、フルシチョフは、このレーニンの教示を改ざんして、レーニンの当時とは「歴史的情勢が根本的に変化した」という「条件」をもちだして、そういう「平和的な道」の可能性が現在国によって——まさに「条件」しだい——存在するというようにして、「強力と独裁の道」という基本原則の臆面もない修正をあえて強行したものである。ところが、「わが国のマルクス・レーニン主義者」たちは、この種の議論の修正主義的本質に気がつくどころか、これに盲従し、さらにおどろくべき論理的錯乱をつけ加えて、フルシチョフの『条件』による、『議会的な道』の可能性の主張をば、全くの俗物的日和見的な『条件』ぬきの『議会的な道』の可能性の仮定という、限度なしの修正、改ざんにまでおしすすめているのである。

第二に、『報告』は、それによって、「根本的な社会変革の遂行を保証する諸条件がつくりだされるであろう」と述べているのに、「綱領」は、これを「革命の条件をさらに有利にすることができ」などという、およそ無意味な景気づけのかけ

声につくりかえてゐる。いったい、「革命の条件」とは、どういふ「条件」なのか？「さらに有利にする」といふが、それまでになが、どういふことを「有利にする」かについて、一言半句説明がないのに、どうして「さらに」などといえるか？

三 「国会で安定した過半数をしめることができるならば」といふ、まったくありもしない架空の仮定、つまり、「棚からボタ餅が落ちてきたならば」といふのと全く同じで、たゞめの仮定から出発して、そこから、「では、ただちに口を開けて首尾よく餅をくわえる」、つまり、「革命勢力を動員して強力によって反革命権力をうちたおして首尾よく革命権力をうちたてる」といふ当面の「目標」達成に到達するかというのと、どうして、ことは基本原則どおりにはけつして運ばないことになっているのである。「目標達成」までには、まだ二つの大切な「仮定」がよこたわっているのである。その次第は、つぎのとおりである。

第一の仮定、(これが「基本」である)——「国会で安定した過半数をしめることができるならば……」

第二の仮定——「一定の条件があるならば……統一戦線政府をつくるためにたたかう。」

そこで統一戦線政府ができたところで、

第三の仮定——「この政府を支える統一戦線の力の成長の程度が大きいならば、……この政府は革命の政府になることができる。」

そこで統一戦線政府が「革命の政府」になることができたところで、はじめて、この「革命の政府」によって、「わが国の独占資本を中心とする売国的反動支配をたおし、わが国からアメリカ帝国主義をおいはらって、人民の手に権力をにぎることができる。」

そこで、「革命の政府」ができ「人民の手に権力をにぎることができる」ようになってはじめて、どうなるかといえ、
 なんと、

「名実ともに、国会を国の最高機関とする、人民の民主主義国家体制を確立する」のである！

この「名実ともに」という言葉のあじわいのなんと深いことか!! 「人民民主主義国家体制」なるものが「確立する」までは、とくに革命勢力が「国会で安定した過半数をしめることができる」までの間は、「この国会」は「ブルジョア議会」であって、「人民の意志を代表する、真の民主主義の機関」というのは「名」ばかりであって、その「実」は「反動支配の道具」であつたのだが、第一から第三まで、三つの奇蹟的な仮定の実現のおかげで、たちまち、この「ブルジョア国会」は「生れ変り」をとげ、「名」ばかりでなく、その「実」も、「真の民主主義、勤労人民のための民主主義の機関」となり、この「生れ変って、名実ともにかねそなえることになった、ブルジョア国家」が「人民民主主義国家体制」の中で、なんと「最高機関」に成り上るのである！

ここに並べたてられた三つの仮定のつながり具合を、さきの『フルシチョフ報告』の該当箇所と見くらべるならば、「綱領」が、『報告』の修正主義的主張をば限度なしにおしすすめて、それこそ救いようのないほど混乱させ、日和見主義的・修正主義的におしゆがめてしまっていることが、歴然となってくる。

第一に、『報告』は、まずはじめに「プロレタリアートを中核とする統一戦線を強化・発展させ、日和見分子をしりぞけ、反人民的な反動勢力をうち負かし」、「プロレタリアートとすべての勤労者との大衆的革命運動にささえられて」、そこで「議会内で安定した過半数をしめることができる」ならば、これによってはじめて、「ブルジョア議会は、真の民主主義、勤労人民のための民主主義の機関になることができる」「根本的な社会変革の遂行を保証する諸条件がつくりだされる」と述べている。ところが、

「綱領」は、この順序をあべこべにひっくりかえし、「国会で安定した過半数をしめることができるならば」という奇蹟的仮定をいきなり最初にかかげ、「国会で安定した過半数を占めることができ」たところではじめて「統一戦線政府をつくるためにたたかい」をすすめ、つぎに、「統一戦線政府ができたところで、これを革命の政府にするために」はじめて、「強大な統一戦線が発展し、反民族的反人民的勢力を敗北させる」という「条件」がや、おら日程に上ってくる、と説いているのである。そして、さらにそのつぎに、「革命の政府ができた」ところで、はじめてや、と、「わが国の独占資本を中心とする売国的反動支配をたおすことができる」ようになる、と言うのである！

第二に、『報告』は、「ブルジョア議会が、真の民主主義、勤労人民のための民主主義の機関となることができ」、これによって「根本的な社会変革の遂行を保証する諸条件がつくりだされるであろう」と述べて、「人民民主主義体制」のもとでかつての「ブルジョア議会」が「真の、人民民主主義の機関に生れ変わることができる」という、まぎれもない修正主義的主張をかかげているのであるが、これにたいして、「綱領」は、これをさらにおしすすめて、「人民民主主義体制」のもとでかつての「国会」は、「名実ともに国の最高機関となる」とまで、極言しているのである！国家独占資本主義のもとで「反動支配の道具」となっている「ブルジョア国会」は、まさに「世界の平和、民主主義、社会主義の勢力」のおかげで、それ自身を生みだし・それ自身を不可欠の構成要素としている・国家独占資本主義体制の「変革を推進する、人民に奉仕する道具」になりかわり、国家独占資本主義の根本的変革のためのもっとも重要なデコとなり、その根本的変革のあとに生れる人民民主主義体制のもとでは、「名実ともに国の最高機関」としてりっぱに生きつづけ、社会主義社会建設から共産主義社会建設にいたるまで、長期にわたって不朽の歴史的功績をとどめることになる！なんと、変り身の早い、使手によってどんな強大な作用をもいとなみうる、不死身の「国会」であろうか！こういう「綱領」の主張は、カ

ウツキー、フルシチョフの修正主義など遠く足もとにもおよばない、まさに前代未聞の超修正主義と称されなければならぬものである。

四 『報告』が「資本主義がまだ強く、巨大な軍事的警察的機関を資本家が握っている国々では、社会主義への移行は、激しい階級闘争、革命闘争を伴うであろう」と述べて、こういう「条件」のもとでは、「強力と国内戦の道」が不可避であることを明示しているのであるが、「綱領」の作成者たちは、さきに袴田論文について検証されたように、——「資本主義がまだ強く、国内独占資本とアメリカ帝国主義が巨大な軍事的警察的機関をその手中に握っている」という事実をあれこれ数えあげながら、しかも——この「激しい階級闘争、革命闘争」をも「もちろん（?!）ただし、（?!）武力革命だ」とすることは間違いないある」（?!——山本）と臆面もなくそのわずかに残された「革命的」内容をすっかり去勢し、まさに手段をえらばない日和見主義的、修正主義的歪曲を強行しているのである。これこそまさに、自棄されたフルシチョフ修正主義である！

だが、それにもまして、決定的に重大なことは、「国会で安定した過半数をしめることができるならば」という棚ボタ式仮定にはじまる架空の「道」をえがいて事をすましているという、無責任きわまるやり方そのものである。「過半数をしめることができれば」よいが、もし「しめることができなかったならば」どうするのだろうか? 的確にして科学的な分析にもとづいて明確な「道」を指し示し、全責任を負って最後まで奮闘すべき「前衛党指導者」が、なんという卑劣な論法を弄していることだろうか！

「綱領」の内容をその全体にわたって、『フルシチョフ報告』と読みくらべることによって仔細に吟味することは、いろいろの諸事実をあきらかにする手がかりを豊富に提供し、きわめて教訓的なのであるが、当面、「わが国のマルクス・レーニン主義者」がフルシチョフ修正主義とどのようにたたかっているかをただしく事実にもとづいて的確

に判断するために必要な材料としては、以上の検討によって十分に所期の効果をあげることができたものと考えられるので、必要となつたばあいには、あらためてそのつど行論においてとりあげることにし、本節での「綱領」と『報告』との「内的関連」にかんする考察は、一応この程度にとどめておくことにしよう。

ただ、一九六一年七月、日本共産党第八回大会において、左にみたような徹頭徹尾フルシチョフ修正主義に忠実に追隨し、さらに限度なしの歪曲と混乱を加えて「創造的」につくりだされた「日本共産党綱領」が、満場一致をもって正式に決定されたという事実に関連して、ぜひとも、つぎの二点をあげて、読者諸君の切実な関心をよびおこしておかなければならない、とわたしは考える。

その第一点は、現在、ますます明白となつてきている「日本共産党」の現「指導者」たちの修正主義的偏向にたいして、その誤りを暴露し、その似而非前衛ぶりと仮借なくたたかっているかつての「指導的黨員」、とくに、第八回大会当時「綱領」を支持し、その決定にたいして徹底的にたたかわず、むしろ積極的にか消極的にかこれに賛意を表してきたという元「指導的幹部」の、現「指導層」にたいするたまたま、か、方の問題である。現在の時点においてあらわれている「日共指導層」の修正主義的偏向を徹底的に批判することは、うたがいもなく正しい。だが、それだけではたして、その批判は、マルクス・レーニン主義的批判として十分な資格をもつものといえるだろうか？ そうした現「指導層」にたいする批判だけで、労働者および勤労大衆を十分納得させ、これによって、真の正しい統一戦線の方角にかれらをひっぱってくることができるだろうか？ わたしは、それだけでは、けっして、マルクス・レーニン主義的批判とはいえないし、真面目な労働者、勤労大衆をひきつけることはむづかしいと考える。いや、そればかりではない。こうした「批判」ばかりくりかえしているときには、当の批判者——元「幹部」——自身にたいする大衆

の信頼もうすれ、勤労大衆はよるべき革命理論もつかめないうまに放置され、わが国の革命運動は底知れぬ停滞の中におちいつてしまふおそれがある。なぜか？ それは、第一に、当の批判者（元「幹部黨員」）が、真のマルクス・レーニン主義者としての自己批判をただしやりとげていないからである。この批判者（元「幹部黨員」）は、かつてフルンチヨフ修正主義をさらにいっそう歪めてつくられた「綱領」を支持し、これに衷心から賛意を表し、この「綱領」の「正当性」を労働者や勤労大衆に熱心に宣伝していたものである。この自乗された修正主義の見本である「綱領」をば「マルクス・レーニン主義」の見地からみて完全に正しいとみずから判断したからこえ、まごころから支持し、賛成し、宣伝したものである。（もし、その「理論的正当性」を自分の頭で判断して行動したのではなく、その内容の良し悪しはよく考えず、また判らず、たださまざまに「政治的考慮」にのみとづいて行動したというのであれば、その人は、すでにその時点において完全な似而非レーニン主義者であつたわけであり、そんな人が今日にわかに、あいかかわらぬ「政治的考慮」から、現「日共指導層」を非難・攻撃したところで、真面目な労働者や勤労大衆のうちのだれが、かれのことを信用しようか？）現「日共指導層」の修正主義的偏向は、すでに「綱領」の中に動かしがたく根を張り「体系化」されているのであつて、もし、その批判者（元「幹部黨員」）がその時点において「綱領」を正しいものと判断したとすれば、その時点においてかれは、現「日共指導層」と同じく、完全に修正主義的偏向にとらわれていたわけである。それゆゑ、その批判者（元「幹部黨員」）は、現「指導層」にたいして仮借ない非難・攻撃をおこなうばあいには、まずもつて、かれ自身そのとりことなつていた修正主義的偏向にたいして仮借のない徹底した批判を、つまりレーニン主義的自己批判をなしとげなければならぬ。「自分はかつてこういう全くまちがつた考え方に支配されており、そのためにこういう誤りをおかし、完全に誤っている『綱領』を、こういうように理解し、

そのためにこのように支持し、賛成し、宣伝してきた。マルクス・レーニン主義理論についての理解の不足、日本の現状分析についての不勉強と無理解から誤った結論をひきだし、誤った修正主義理論を正しいものと判断するようになった。正しくとらえた真のマルクス・レーニン主義理論とは実はこういうものであり、日本の現情勢の分析が示すところは正しくはこのようになっており、われわれは、こういう正しい現状分析にもとづいてこういう変革路線をうちたてなければならぬし、これこれこういう宣伝活動をし、労働者、勤労大衆をこのように組織し、動員しなければならぬ。自分は今後かつての誤りを償うべく倍旧の献身的努力を傾ける決心である。」——こういうように説明し、実行して、大衆に納得してもらうこと⁽²⁾によってはじめて、正しい自己批判をなしとげたといえるのであり、これが、現「指導層」を真に徹底的に批判しうるための第一の先決条件である。つまり、さきに挙げたレーニンの「真のマルクス・レーニン主義者であるか否かを識別するための必要不可欠な基準」、すなわち「一、誤りを公然と認めること。二、その原因をあばきだすこと。三、それを生んだ情勢を分析すること。四、誤りを改める手段を注意深く討議すること」⁽²²⁾を忠実に守り実行し、修正主義的「綱領」にたいして真のマルクス・レーニン主義的綱領をつくりあげ、これを宣伝し、真に人民大衆の血となり肉となるように奮闘すること、これである。それゆえ、今日、真のマルクス・レーニン主義者であることを実証する方法は、ただひとつ、すなわち、レーニン主義的自己批判を徹底におこない、真にその名に値する革命的理論をつくりあげ、本当に、献身的な実践活動によって大衆のゆるぎない信頼をかちえ、右の理論をもって人民大衆を完全に武装させ、強力な革命的主体勢力をつくりあげるために奮闘すること、これではなければならない。だが、レーニン主義的自己批判をおこなうことだけでも、容易ではない。日本の正しい現状分析にもとづいた革命理論をつくりあげることも、きわめて緊要でありながら、さらにいっそう困難であり、

今日までまだ出来上っているとはいえない。これらを首尾よくなしとげて、はじめて、「規律があり、マルクス・レーニン主義の理論で武装し、自己批判の方法をとる、人民大衆と結びついた前衛党」を築きあげることが可能となる。これらのことを真剣に考慮して完遂すべく奮闘しないならば、ただ現「指導層」の非難・攻撃をくりかえし、自己の犯した誤りについてはすこしもふれず、現「指導層」に対比して自己の「正当性」、「優越性」あるいは「レーニン主義的正統性」だけを強調するばかりに終始しているならば、これは、現「指導層」と同じ「品性」がただ別様に発露しただけのもので、かえって、マルクス・レーニン主義にたいする人民大衆の信頼を永久に失わせ、かれらが正しい解放の道をつきすすむことをいじめるしく妨害するものといわなければならない。自分自身について「闘私批判」をりっぱにやりとげてこそ、レーニン主義的自己批判をやりぬいてこそ、真のマルクス・レーニン主義者として修正主義批判を完全にやりとげることができる。かつての指導的幹部「日本共産黨員」が今日熱心におこなっている現「日共指導層」の修正主義的偏向にたいする批判のあり方をみると、わたしは、この点について真剣に反省することが緊要だと考えるものである。

(21) 「大衆に本当に納得してもらい、ゆるぎない信頼を回復する」ことは、とくに元「指導的幹部」にとつては、決定的に重要である。「かつての自分の主張と行動はまちがっていた。いまこれを全面的に改めた。現指導層はいぜんとして修正主義的誤りを犯している」といって批判・攻撃するだけでは、けっして大衆の信頼はえられるものではない。従来から「わが国のマルクス・レーニン主義者」の中には、「あとからいつでも妥当に是正できる」という神式手合があまりにも多いのである。

(22) 本論稿（一）の「二」（本誌第二十一巻第一号、一七—一九ページ）参照。

その第二点、この「綱領」を絶対に正しいものとして信奉しているかぎり、いいかえれば、たとえ「政治的考慮」にもとづいて一時フルシチョフ修正主義と「文字の上で闘争する」ような形をとることがあるとしても、この「綱領」

の「正当性」を固執しているかぎり、その「前衛党指導層」は終始一貫フルシチョフ修正主義に忠実に追隨し、フルシチョフ修正主義路線を守りつづけているものだ、という事実を疑うわけにはいかない、ということである。この「綱領」が根本的に批判され、全面的に書き改められたときにはじめて、わが国の「前衛党」は真に革命理論の名に値するものを築きあげる条件が——ただしくは、条件のひとつが——できたということが出来る。わたしが拙著『構造改革論批判』の最後の結びの中で「わが国では、真に革命理論の名に値するものがつくりだされるにいたっていない」⁽²³⁾（三一八ページ）と記したのは、右のような意味合いにおいてであり、また、柿氏の再攻撃論文の中の「二番煎じの路線転換論の自己矛盾」などというわけわからないや、っ、つけ、的、せり、ふ、にたいして、そう言われても「少しも痛痒を感じない」⁽²⁴⁾とお答えしておいたのも、右のような事情をわたしが念頭においていたからなのである。

(23) 本論稿の(二)の「六」(本誌第二十一卷第二号、四一ページ)参照。

(24) 本論稿の(三)における追記の「三」(本誌第二十一卷第三号、六五ページ)参照。

六

つぎに、「綱領」とフルシチョフ修正主義との緊密な「内的関連」をよりいっそう明確にするために、「綱領」決定にあたって「わが国のマルクス・レーニン主義者」の「最高指導者」がどのようにフルシチョフ修正主義を「批判」していたか、あるいは、どのようにこれに衷心から追隨していたかを示す事実を、簡単にみておこう。つぎに抜粋してかかげるのは、「もっともすぐれた最高指導者」と目される宮本顯治氏の主著、『日本革命の展望』（一九六二年十一月刊行）の中の、とくに『フルシチョフ報告』について明確な評価を開陳している箇所であるが、紙数の関係上、原

正しい批判はいかにあるべきか（五）

文を列挙して、簡単な注釈をつけ加えることにとどめておこう。

『ソ連共産党第二〇回大会の不滅の貢績の称揚』

①「ソ連共産党第二十回大会は中国共産党第八回大会とともに国際共産主義運動を新しい段階にみちびくうえで大きな役割を演じた。それはマルクス・レーニン主義理論の創造的發展と党生活のレーニン主義的原则を基準とする党組織およびその運営の改善の契機を国際共産主義運動にあたえた。各国共産党はマルクス・レーニン主義の基本原則のうえに立って、それぞれの国の特殊性を正しくつかみ、理論を創造的に發展させ、社会主義への移行の新しい形態の創造にむかつてすすんでいる。各国の党は、またソ連共産党の個人崇拜批判にまなび、個人崇拜とセクト主義と官僚主義をとりのぞき、党内民主主義を發展させ、党を組織的に強化するために努力している。ソ連共産党第二十回大会以後おこなわれた各国共産党大会は、それぞれ、この成果をしめしている」（一九五八年七月「綱領問題についての中央委員会の報告」、前出、一七三—一七四ページ、傍点—山本）。

ここに示されているのは、『フルシチョフ報告』にたいする熱烈な賞め言葉であり、教祖にたいする弟子の真心こめた讃歌である。

『報告』の「社会主義への移行の形態」についての主張の支持・拡大」

②「国際情勢の変化は、それぞれの国の革命運動の發展に大きな影響をあたえるにしても、その国の革命の性格は、その国の具体的歴史的条件によって決定される。このマルクス・レーニン主義的見地が古くなったという見地は、まったく誤っている。モスクワ宣言やソ連共産党第二十回大会は、けっしてこのような見方をしていない。

フルシチョフ同志が二十回大会で社会主義への移行の多様な形態についてのべたとき、かれはレーニンのつぎの言葉を引用している。『すべての国民は社会主義にいきつくだろう。これはさけられない。だが全部がまったくおなじやり方でいきつくのではない。それぞれの国民は、民主主義のあれこれの型で、プロレタリアートの独裁のあれこれの型で……独特のものをもちあすだろう。……この未来のみとおしを、単調な灰色一色でえがきだすくらい、理論的に幼稚で、実践的にはこっけいなことはない。』

レーニンは、『民主主義のあれこれの型で』『独特のもの』を追求すべきだといっている」（前出、二五—二五二ページ、傍点—山本）

フルシチョフがレーニンの論文を故意に歪曲してその内容を全くちがったものに改ざんしていることは拙著の中でも明らかにしているが、宮本書記長はこのフルシチョフの改ざんをそのままのみにしたばかりでなく、さらにその修正を拡大し、レーニンの「ブルジョア民主主義」を「人民民主主義」におきかえることまでしているのである。

(25) 前出、二〇九―二一七ページ、なお、本稿でもさきの「三」の中で、この点についてふれている。

〔『報告』の「国際情勢の根本的变化」という主張への追随〕

③「ソ連邦共産党第二十回大会で明らかにされた第二次大戦後の国際情勢の根本的变化……」(前出、二四一ページ、傍点―山本)。

④「ソ連邦共産党第二十回大会であきらかにされた国際情勢の根本的变化……」(前出、二五〇ページ、傍点―山本)。

〔「平和的移行」論と「移行に強力をつかうかどうかは、搾取者階級の態度できまる」という主張のうのみと利用〕

⑤「……五一年綱領が『日本の解放の民主的変革を、平和的手段によって達成しようと考えるのはまちがいである』という断定をおこなって、そのような変革の歴史的・理論的可能性のいっさいを思想としても否定して、いわば暴力革命不可避論でみずからの手を一方的にしぼりつけているのは、あきらかに、今日の事態に適合しないものとなっている。したがって、七中総の決議は、どういふ手段で革命が達成できるかは、最終的には敵の出方によってきまることであるから、一方的にみずからの手をしぼるべきではないという基本的な見地になつておこなわれた必要な問題提起であった」(前出、二二三ページ、傍点―山本)

つまり、「社会主義への移行に強力をつかうか、つかわないかは、搾取者階級自身の出方できまる」というフルシチョフの画期的主張は、フルシチョフと同じ「品性」をもつ「わが国のマルクス・レーニン主義者」の、これまで「基本原則」によつてしぼりつけられていた自由のきかない「手」を、はじめてときはなして自由にした、というわけである。

⑥「平和的移行の可能性を定式化せよという意見には、『綱領問題について』のように敵の出方をうんぬんすることは、いつでもいえる一般的なことをもちだしているにすぎないといつて批判するものもあるが、それには賛成できない。むしろ平和的移行の、

正しい批判はいかにあるべきか(五)

可能性をマルクス・レーニン主義の革命論の発展として新しく確認しうる場合だからこそ、その不可能性についての考察を必要とするのであり、もしそれを除外するならば、修正主義的誤りに陥ることになるのである。

重要なことは二つの側面を統一的に考察しつつも、平和的移行の可能性の条件の拡大のための努力を強調することである。革命運動は平和的移行の可能性をつくりだす条件の実現をめざして努力をつくまなくてはならないし、その努力の成功は、それだけ反動勢力の抵抗をより困難にする条件を拡大することでもある。しかも、なおかつ闘争の程度や形態のはげしさは、プロレタリアトではなくて、反動勢力の抵抗力、かれらが暴力を使うかどうかにかかっているという真理を不断に忘れてはならないのである」(前出、一九五七年十二月「綱領討議の問題点について」、三五四―三五五ページ、傍点およびゴシック体―山本)。

⑦「以上であきらかなように、マルクス・レーニン主義党としては、革命への移行が平和的な手段でおこなわれるように努力するが、それが平和的となるか非平和的となるかは結局敵の出力によるということは、国際共産主義運動の創造的成果としてマルクス・レーニン主義の革命論の重要原則の一つとなっている」(前出、三一五ページ、傍点およびゴシック体―山本)。

あくまで平和的方法に執着する、フルシチョフ修正主義の忠実な追隨者にとつては、フルシチョフによるマルクス・レーニン主義の臆面もない改ざんが、「マルクス・レーニン主義の革命論の発展」として尊重され、「重要な原則」、輝やかしい「真理」として信奉されなければならないということ、これもまた疑うべからざる真理である。

「『報告』の「平和共存」論と「戦争不可避否定」論についての支持と宣伝」

⑧「戦争と民族的奴隸化とファシズムの勢力に不利に、平和と独立と民主主義の勢力に有利に変化しつつある国際情勢の発展は、朝鮮戦争で頂点に達した国際情勢の緊張をこの数年間、いちじるしく緩和した。朝鮮とインドシナの戦争の停止、エジプトにたいする英仏の侵略とハンガリーにたいする帝国主義者の陰謀の急速な失敗は、一進一退をつづけながらも平和勢力が戦争勢力を一步一歩圧倒しつつあることを示している。またそれは国際緊張の緩和と平和共存への発展が世界の支配的な傾向であることを示している。それはまた『戦争は不可避でない』と宣言したソビエト連邦共産党第二十回大会のテーゼの正しさを証明している」(前出、一七五ページ、傍点およびゴシック体―山本)。

『フルシチョフ報告』の修正主義の本質を見ぬことができず、むしろこれを「正しい」ものと盲信して全面的に追隨

するときには、アメリカ帝國主義による強力的侵略の不斷の拡大・強化という敵然たる事實は、「國際緊張の緩和と平和共存への発展が支配している」という、バラ色の光景となってその目に映るのである！

さて、現代修正主義の巨頭であるフルシチョフの修正主義的歪曲が明確にうちだされたソ連共産党第二〇回大会報告にたいする、「わが国のマルクス・レーニン主義者」とくにその「最高指導者」たちが「先驅的に」どのように「たたかってきたかは、およそ以上あげた諸事實によってあますところなく明白にされることができたと考えられる。そこで、さらにすすんで、櫛氏が「フルシチョフらの修正主義思想がひとつの体系化を上げつつあることが明確化された」とはっきり「指摘」されているところのソ連共産党第二二回大会報告および「新綱領」にたいして、「わが国のマルクス・レーニン主義者」のうちの「指導者」たちがどのように「先驅的に」たたかっているかということ、同じく動かすことのできない諸事實にもとづいて、検証することをこころみなければならない。それによって——まったく、ことのついでではあるが、——櫛氏が右の「指摘」をどこから、どうして無断で借用してこられたかということも、すっかり明るみになることになるであらうと期待されるのである。

(一九六八・二・二五)